

高等学校における教科指導の充実

保 健 体 育 科

保健体育における指導と評価の一体化
～思考力・判断力の育成を目指して～

栃木県総合教育センター
平成26年3月

ま え が き

現代を生きる私たちは、政治・経済・文化・情報・科学・技術など様々な面において状況が絶えず変化する社会の中にいます。今後も、少子化・高齢化の急速な進行や、グローバル化にともなう国際競争の激化、地球規模での環境の変化等が予想されるとともに、世界的に知識基盤社会へと移行しつつあり、新しい知識・情報や的確な判断力、コミュニケーション能力等を身に付けることの重要性がますます増大していくものと思われます。

そのような中で「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」をもち、あわせて「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」や「たくましく生きるための健康や体力」を備えた人間を育成すること、つまり「生きる力」をもつように子どもたちを教育することが求められています。

高等学校においては、平成25年度入学生より新しい学習指導要領が全面実施となっています。この新学習指導要領では、「生きる力」を育むためには、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成」をバランスよく行うことが重要であるとしています。また、「主体的に学習に取り組む態度」の育成も大切です。このように様々な面でバランスのよい教育を実施するためには、指導を計画的に行うとともに、PDCAサイクルに基づく工夫・改善を進めていく必要があります。また、学習の評価についても、計画的に多角的な観点から生徒を評価するとともに、その評価を次の指導の改善につなげる「指導と評価の一体化」を図ることが求められています。

これらの求めに応じるためには、多くの努力と工夫・改善が必要となります。そこで、栃木県総合教育センターでは、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。特に今年度は、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、指導と評価の一体化を図るための授業改善について、国語科、数学科、理科、保健体育科、家庭科の各教科で調査研究に取り組みました。教科指導を充実させるために、本冊子を活用し、生徒の学力向上に向けた取組の成果をあげていただきたいと思います。

最後になりますが、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成26年 3 月

栃木県総合教育センター所長
金 井 正

目 次

I 本調査研究の背景	1
1 学習指導要領改訂の基本的な考え方	
2 学習評価の在り方	
II 保健体育の評価に関して	7
1 体育の評価の観点について	
2 保健の評価の観点について	
3 単元の指導計画・評価計画の作成について	
4 指導と評価の一体化	
III 保健体育の調査研究をはじめるにあたって	11
研究事例 1 体育「ソフトボール」における指導と評価の工夫	12
研究事例 2 体育「バスケットボール」における指導と評価の工夫	26
研究事例 3 保健「健康の保持増進と疾病の予防」における指導と評価の工夫	37
IV おわりに	48

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

I 本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、「指導と評価の一体化」等の各教科に求められている課題解決を図るための教科指導の在り方を探ることに重点を置き、国語科、数学科、理科、保健体育科及び家庭科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方及び学習評価の在り方について整理する。

1 学習指導要領改訂の基本的な考え方

(1) 教育基本法の改正から、学習指導要領の改訂までの流れ

ア 教育基本法の改正（平成18年）

「科学技術の進歩・情報化・国際化・少子高齢化・核家族化」「価値観の多様化」「社会全体の規範意識の低下」など、昨今の教育を取り巻く環境の変化を受けて、平成18年に教育基本法が約60年ぶりに改正された。

新しい教育基本法では、「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法の普遍的な理念は大切にしつつ、時代の変化に即した内容を盛り込みながら、

- 知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した人間
- 公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画する国民
- 我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人

の育成を目指している。

イ 学校教育法の改正（平成19年）

教育基本法の改正を受けて、学校教育法をはじめとする教育に関係する諸法令が改正された。平成19年に改正された学校教育法では、新たに「義務教育の目標」が規定された。また、小・中・高等学校等においては、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた（第30条第2項、第49条、第62条等）。

ウ 中央教育審議会答申（平成20年）

新しく明確にされた教育の基本理念を受けて、平成20年1月に中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」が出された。この答申では、知識基盤社会への移行や、グローバル化による国際競争の激化等、大きく社会構造が変化する中で、ますます「生きる力」が重要であるとしている。

また「生きる力」を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素は「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の三つであるとした。

エ 高等学校学習指導要領改訂（平成21年）

以上の法改正及び答申を受けて、平成20年には小・中学校の、平成21年には高等学校・特別支援学校の学習指導要領が改訂された。小・中学校においてはそれぞれ平成23・24年度から一斉実施、高等学校においては原則として平成25年度入学生から年次進行で実施されている。なお、総合的な学習の時間や数学、理科など一部の教科等では先行実施されている。

(2) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

今回の学習指導要領の改訂は、平成20年1月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に基づいている。この答申の中では、学習指導要領改訂の基本的な考え方として、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、

- ① 「生きる力」という理念の共有
- ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ③ 思考力・判断力・表現力等の育成
- ④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

の6点を挙げており、その中でも、特に、②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要としている。

これらをまとめると、

- ◇ 大きく変化する社会に生きる中で必要とされる「生きる力」を育むため、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた教育をすること **【生きる力】**
- ◇ 「確かな学力」を身に付けるためには、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と、それらを活用して「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」をバランスよく行うこと **【習得と活用】**
- ◇ 「学習意欲」を高め、家庭学習も含めた「学習習慣の確立」を図ること **【学習に取り組む態度】**

などが主なポイントとして挙げられる。

2 学習評価の在り方

平成22年3月に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下「報告」という。）がとりまとめられた。その中で、「学習評価の意義と学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性」について、次のように述べられている。

- 学習評価は、児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるものである。学習指導要領は、各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し、学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。
- また、従前指導と評価の一体化が推進されてきたところであり、今後とも、各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である。

特に、「教育水準の維持向上を保障する」という観点で学習評価を見ることは重要であり、単に生徒の成績を付けるために学習評価があるのではないことに留意する必要がある。

(1) 学習評価の基本的な考え方

先ほど述べた「報告」を受けて、同年5月に、文部科学省初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（以下「改善通知」という。）が出された。

「改善通知」では、「学習評価の改善に関する基本的な考え方」を次のように述べている。

- 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要であること。その上で、新しい学習指導要領の下における学習評価の改善を図っていくためには以下の基本的な考え方に沿って学習評価を行うことが必要であること。
- 【1】 きめの細かな指導の充実や児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るため、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価する、目標に準拠した評価を引き続き着実に実施すること。
- 【2】 新しい学習指導要領の趣旨や改善事項等を学習評価において適切に反映すること。
- 【3】 学校や設置者の創意工夫を一層生かすこと。

また、「報告」においては、

- 学習状況を分析的に見る「評価の観点」については、成績付けのための評価だけでなく、指導の改善に生かす評価においても重要な役割。
- そのため、今回、学習指導要領等で定める学力の3つの要素に合わせ、評価の観点を整理することとし、概ね、
 - 【1】 基礎的・基本的な知識・技能は「知識・理解」「技能」において、
 - 【2】 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等は「思考・判断・表現」において、
 - 【3】 主体的に学習に取り組む態度は「関心・意欲・態度」において、それぞれ評価を行うことと整理。
- 各教科の評価の観点は上に示した観点を基本としつつ教科の特性に応じて設定。

としており、簡潔に言えば次の3点、

- ◇ 観点別学習状況の評価の実施
- ◇ 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の実施
- ◇ 指導と評価の一体化

の更なる充実が求められている。

なお、「報告」では、高等学校における学習評価の現状と課題として「（高等学校においては）現在の学習評価の考え方に基づく実践について小・中学校ほど十分な定着は見られない」と指摘し、高等学校においても、評価による指導の改善を図るとともに、評価を通じた教育の質の保障を図るため、観点別学習状況の評価を推進していくことが必要であるとしている。ただし、高等学校においては、各学校の生徒の特性、進路等が多様であることへの配慮も必要としている。

(2) 観点別評価

これまで述べてきたとおり、学力の三要素を適切に評価するために、原則として四つの観点で学習評価を行うことが求められている。

学力の三つの要素	学習評価の観点
○ 基礎的・基本的な知識・技能	「知識・理解」 「技能」
○ 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	「思考・判断・表現」
○ 主体的に学習に取り組む態度	「関心・意欲・態度」

ただし、上の四つの観点を基本としつつ教科の特性に応じて「各教科の評価の観点」をそれぞれ設定している。

これまで、学校においては「ペーパーテストの点数による評価」が中心で、「知識・理解」への偏重があり、更にはいわゆる「詰め込み型の学習」につながる面もあった。また、経済協力開発機構（OECD）が行う「生徒の学習到達度調査（PISA）」などの国際調査の結果から、日本の児童生徒には「読解力」「表現力」「知識の活用能力」「学習意欲」などの面で課題があると指摘された。これらの反省から、小・中学校においては「思考力・判断力」等のペーパーテストには現れにくい学力を適切に評価するための取組がなされ、観点別評価が着実に実施されている。一方、高等学校においては、指導要録に「観点別学習状況の評価」を記載することとはされておらず、観点別評価が小・中学校に比べると定着していない状況にある。

高等学校においても、ペーパーテストだけでなく、日頃から観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、学習活動の特質、評価の観点、場面などに応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが大切である。

(3) 目標に準拠した評価

以前、小・中学校では児童生徒の成績を集団の中における相対的な位置（順位）により評価する「集団に準拠した評価」（いわゆる相対評価）が行われていた。

平成10年の学習指導要領改訂にともなって学習評価の在り方が見直され、現在のような児童生徒一人一人の学習状況を学習指導要領の定める目標に対する実現状況によって評価する「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）に改められた。右の図1、図2にそれぞれのイメージを示す。

「集団に準拠した評価」においては、「どのような集団においても学業成績の分布はほぼ同じになる」という考え方が根底にある。この考えを基にして上位から何％は「評定：5」のように、順位による評定を行うことになる。しかし、実際には集団によって分布に違いがあり、また児童生徒一人一人の達成度を適切に評価する必要から、「目標に準拠した評価」に改められた。

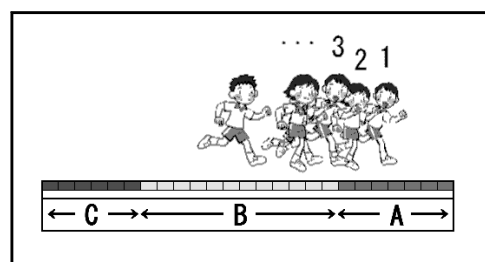


図1 集団に準拠した評価のイメージ

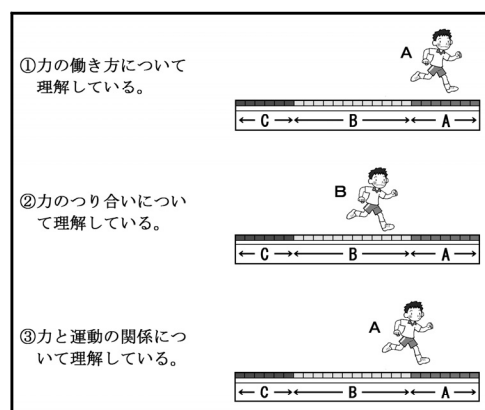


図2 目標に準拠した評価のイメージ

「目標に準拠した評価」においては、「児童生徒一人一人が、学習の目標をどの程度達成しているか」によって評価を行う。そのためには「学習の目標を達成した」とはどのような状況かを各教科の観点別に明確化しておく必要があり、その判断の拠り所とするものを**評価規準**という。評価規準は通常、学習の内容ごとに学習指導要領の定める学習の目標と照らし合わせて「おおむね満足できる状況」を示す。

例えば、理科の科目「物理基礎」の学習内容において、「イ 様々な力とその働き」のうちの「(イ) 力のつり合い」の目標は、(学習指導要領より) 次のように設定できる。

◇目標： 物体に働く力のつり合いを理解する。

この目標が、「達成された状況」とはどういう状況であるかを観点別に具体的に示したものが評価規準であり、例えば、

「関心・意欲・態度」：○身の回りの物体における力のつり合いを考察しようとしている。

「思考・判断・表現」：○物体に働く力がつり合う条件について考察している。

○物体に働く力のつり合いから、未知の力を見いだしている。

「実験・観察の技能」：○力の三要素に留意して、力をベクトルの矢印で表している。

「知識・理解」：○力は、向きをもつベクトル量であることを理解している。

○二つ以上の力について、向きを考えて合成している。

などとなる。これらの評価規準は、各学校において、生徒の実態等を考慮して学習指導計画とともに設定することになる。

なお、評価規準の語尾については、「～しているか。」(疑問形)や「～することができる。」(可能表現)などを用いる例が散見されるが、評価規準は「おおむね満足できる状況」を示すものであるから、原則として「～している。」などとするのが望ましい。ただし、「関心・意欲・態度」の観点のように、「～しようとしている」でおおむね満足できる場合や、教科や内容の特性によっては「～できる」という表現を用いる場合もあり得る。

授業時には、設定した評価規準に照らし合わせて、

A：「十分満足できる」	B：「おおむね満足できる」	C：「努力を要する」
-------------	---------------	------------

のいずれになるかを判断する。その際に、判断の基準とするものを「評価基準」と言うことがある。例えば、「10問の評価問題中、8問以上を正解した場合をA、6～7問正解した場合をB」としたり、「物体に働く力がつり合う条件について考察していればB、物体の運動状態と関連づけて働く力のつり合いを考察している場合をA」としたりするなどの基準が考えられる。いずれの場合でもBに達しない状況をCとする。

ここで、「評価規準」と「評価基準」という二つの語を使い分けているので注意したい。これらの違いは、前ページの図2において次のように例えると分かりやすい。

評価規準（目標を達成した状況を明確化したもの）＝ものさしの種類

評価基準（評価を出す段階における判断の基準）＝ものさしの目盛

以上のように、各単元（題材）毎に「観点別学習状況の評価」を行い、最終的にはそれを評定へと総括する。

なお、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 ～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～」(国立教育政策研究所教育課程研究センター平成24年7月)には、各教科ごとの評価規準の設定例や総括の仕方等がまとめられているので、参考にとるとよい。

(4) 指導と評価の一体化

既に述べたように、学習評価の目的は、単に生徒の成績を付けるためにあるのではなく、教育の質を保障する役割がある。とりわけ、学習評価の結果から、個に応じた指導を行ったり、学習指導の在り方を見直したりすること、つまり「指導と評価の一体化」が求められている。

学習評価を単に学習指導の結果としてとらえるのではなく、評価を通じて指導の改善を行ったり、組織的な見直しをしたりするなど、指導と評価を一体的に行うことが重要である。そのためには、「成績を付けるための評価」だけでなく「指導に生かす評価」を行い、それを学習指導に係るPDCAサイクルに組み込むことが大切である。具体的には、

- ① 「指導計画」を立案する際に「評価計画」を立てる。
- ② その際に、評価の観点のバランスに留意する。
- ③ また、総括の資料とする評価（成績を付けるための評価）だけでなく、「指導に生かす評価」を盛り込むよう留意する。
- ④ 評価の結果から、指導上の成果や課題を検証し、次の指導に生かす。
- ⑤ 個々の達成状況の把握から、達成度が不十分な生徒に対して指導の手立てを講じる。

などがポイントとなる。

これらの取組により、次のようなメリットがあると考えられる。

- あらかじめ学習内容の指導計画とともに評価の観点を生徒に示すことにより、生徒にポイントを押さえた学習をさせるとともに、学習意欲の向上を図ることができる。
- 指導計画とともに評価の観点を明確にすることにより、特定の観点到偏ることなく、バランスの取れた指導をすることができる。
- ペーパーテスト、ノート、レポート、発問等の様々な評価方法の中から、評価の目的・場面等に応じて適切なものを選択することができる。
- 個々の達成状況をこまめに確認することにより、きめ細かい指導をすることができる。
- 評価が計画的・客観的になり、信頼性が高まるとともに、教育水準の保障に寄与する。

ここに挙げたもののほかにも、「指導と評価の一体化」によって、様々な効果を期待することができる。以下では、各教科における指導と評価の一体化の在り方と、実践事例を紹介する。

Ⅱ 保健体育の評価に関して

1 体育の評価の観点について

学習指導要領に示されている体育の目標は以下のとおりである。

運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育て、公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、健康・安全を確保して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。

体育では、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てること」を体育を通して培う包括的な目標と示している。体を動かすことは情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力を育むことにも資する。

前掲の資質や能力を育てるためには、運動の楽しさや喜びを深く味わえるよう、基礎的な「運動の技能」や「知識」を生徒の状況に応じて伸長させるとともに、それらを運動実践に活用する「思考力・判断力」を培うために、運動課題を解決するなどの学習をバランスよく行うことが重要である。

したがって、学習評価においても四つの観点から行うことが求められている。「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(国立教育政策研究所教育課程研究センター)に掲載されている体育の4観点の趣旨を以下に示す。

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるよう、公正、協力、責任、参画などに対する意欲をもち、健康・安全を確保して学習に主体的に取り組もうとする。	生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現を目指して、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫している。また、自己や仲間の状況に応じて体力を高めるための運動を継続するための計画を工夫している。	運動の合理的な実践を通して、運動の特性に応じて勝敗を競ったり、攻防を展開したり、表現したりするための各領域の運動の特性に応じた段階的な技能を身に付けている。	選択した運動の技術(技)の名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、練習や発表の仕方、スポーツを行う際の健康・安全の確保の仕方についての具体的な方法、スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴、運動やスポーツの効果的な学習の仕方及び豊かなスポーツライフの設計の仕方を理解している。

※「体づくり運動」「体育理論」については、「運動の技能」の評価の観点は設定しない。

学習指導要領では、「体づくり運動」に「技能」について示されておらず、「運動」として示されている。これは、「体づくり運動」の体ほぐし運動は、技能の習得・向上を直接のねらいとするものではなく、また、体力を高める運動は、運動の計画を立てることが主な目的となるからである。このことから、評価規準についても「運動の技能」は設定せず、「運動」の内容は「思考・判断」で評価する。

2 保健の評価の観点について

学習指導要領に示されている保健の目標は以下のとおりである。

個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるようにし、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる。

保健は、個人生活及び社会生活における健康・安全に関する内容を、総合的に理解することを通して、自らの健康の管理や健康的な生活行動の選択及び健康的な社会環境づくりなどが実践できるようになるための基礎としての資質や能力を育成することを目指している。

これらの資質や能力を育てるためには、保健の内容を単に知識や記憶としてとどめるのではなく、健康に関する興味・関心や課題解決への意欲を高めるとともに、知識を活用する学習活動を重視して、生徒の思考力・判断力を育成しなければならない。それによって、生徒が、健康で安全な社会を担う人材として、健康に関する適切な環境づくりに関わったり、現在及び将来の生活において健康・安全に関する課題の解決に役立てたりすることにつながる。

なお、「保健」は「(1) 現代社会と健康」「(2) 生涯を通じる健康」「(3) 社会生活と健康」の三つの内容のまとまりからなる。学習指導要領解説の内容のまとまりのリード文に、それぞれの内容について「理解できるようにする」ことが示されているため、学校では知識を身に付けることのみを指導すれば良いと誤解されることもある。しかし、この場合の「理解」は健康・安全に関する「知識・理解」だけでなく、「関心・意欲・態度」や「思考・判断」などの資質や能力を含んでいることを忘れてはならない。

この保健のねらいを達成するためにも、三つの観点から授業を実施することが重要である。すなわち、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」の三つの資質や能力を踏まえて目標を設定し指導するとともに、学習評価においても、三つの観点で評価を行うことが求められている。「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(国立教育政策研究所教育課程研究センター)に掲載されている保健の3観点の趣旨を以下に示す。

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
現代社会と健康, 生涯を通じる健康, 社会生活と健康について関心をもち, 意欲的に学習に取り組もうとする。	現代社会と健康, 生涯を通じる健康, 社会生活と健康について, 課題の解決を目指して総合的に考え, 判断し, それらを表している。	現代社会と健康, 生涯を通じる健康, 社会生活と健康について, 課題の解決に役立つ基礎的な事項を理解している。

3 単元の指導計画・評価計画の作成について

単元の目標を設定

*** 単元を通して、生徒に何を学ばせたいかを明確にすることが大切である。**

○学習指導要領に記述されている目標をもとに、各学校の生徒の実態を考慮して設定する。

○観点ごとに分けて示す。

【体育】学習指導要領解説に準じて「技能」「態度」「知識、思考・判断」に分けて示す。

【保健】「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」の資質や能力を踏まえて、三つに分けて示す。

単元とは

【体育】

学習指導要領解説の「領域」「型：種目」または「種目」

【保健】

学習指導要領解説の内容のまとまりの「項目ア～オ」

観点別の評価規準を設定

*** 学習指導のねらいが達成された生徒の状態を、具体的に想定して設定する。**

評価規準の構造例

方法・活動・場面等	状況	観点
〇〇の練習で	～役割を果たそうとしている	関心・意欲・態度
意見交換で	～を見付けている	思考・判断
ゲームで	～ことができる	運動の技能
学習ノートに	～具体例を挙げている	知識・理解

例) 練習の際に球出しの補助をするなど、仲間の学習を援助しようとしている。

指導計画・評価計画の作成

【指導計画】

*** 「学習指導のねらいが達成された生徒の状態」を、実現するための授業を計画する。**

①ねらいを達成するために、どのように授業を展開し、指導をする必要があるか、指導法を工夫し計画する。

②全ての観点について、学習の場面を設定する。設定する観点のバランスに注意する。

【評価計画】

*** 指導の結果、身に付けさせたいことが身に付いたかを評価する。**

*** 評価に係る最適な時期や方法を観点ごとに整理する。**

①「関心・意欲・態度」「運動の技能」は、原則、指導後一定の期間を設け適切な時期に評価機会を設定する。

②観察により学習状況进行评估する場合、可能なものは複数回の評価機会を設定する。

③観察により学習状況进行评估の場合は、1 単位時間に複数の観点の評価機会を設定しない。

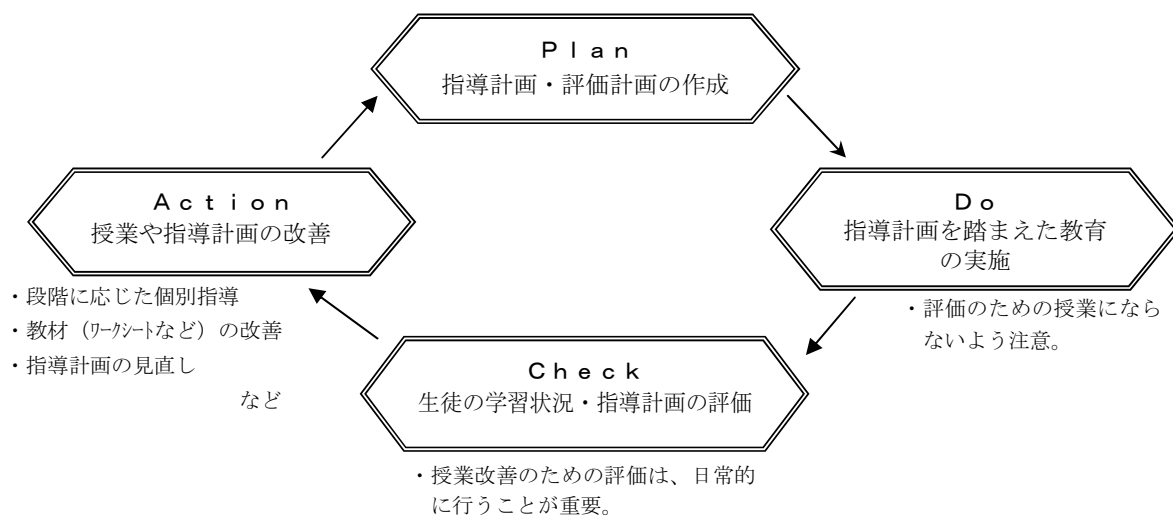
評価の「妥当性」と「信頼性」が重要

「妥当性」と「信頼性」を確保するためには、以下の3点が求められる。

- ・学習指導要領に基づいた指導がなされていること
- ・指導したことが評価されていること
- ・評価方法が適切であること

4 指導と評価の一体化

評価結果は、「成績を出すための評価」であるだけでなく、「指導に生かす評価」でもある。指導に生かす評価にするためには、PDCAサイクルを意識した授業を展開することが必要であり、評価を自分の指導を省みる契機とすることが大切である。



Ⅲ 保健体育の調査研究をはじめるにあたって

「学習指導と学習評価に対する意識調査報告書」によると、高等学校教員は、評価の4観点の中で、「思考・判断」の評価が最も難しいと感じていることが分かる。

「観点別学習評価の実施状況」では、「評価の資料の収集・分析、評価の決定を円滑に実施できているか」との問いに対して、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答している。高等学校教員は「思考・判断」で「そう思う」と答えた割合が5.0%と4観点中最も低く、逆に円滑に実施できていない（「あまりそう思わない」＋「そう思わない」）という割合が50%近くになっている。

保健体育においても、より多くの教員が難しさを感じるのは「思考・判断」の評価であろう。学習指導要領の大きな改訂のポイントの一つが、「思考力・判断力・表現力を育むこと」であるが、「思考力」や「判断力」を授業の中でどう育て、どう評価すればよいのか、具体的なイメージがまだあまりもてていないのが現状ではないだろうか。そこで、各事例では、授業のねらいを思考力・判断力の育成を目指すことに設定し、それらの授業において指導と評価の一体化に取り組むこととした。

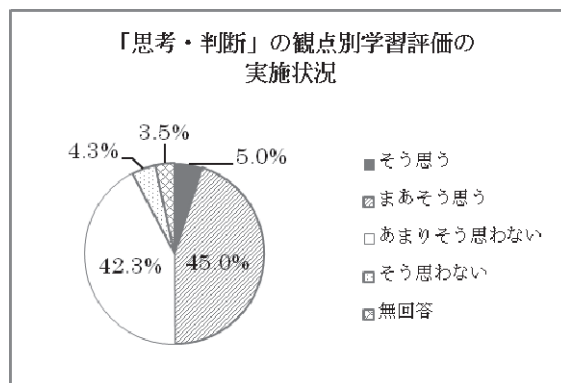
「思考・判断」の評価として現在主に用いられているのは、「学習活動を通して生徒が思考・判断した事柄について、レポートなどの記述内容から評価する」「思考・判断の学習活動の様子を観察し評価する」ことである。この二つの評価方法を適切に活用することで「思考・判断」の評価が可能になる。しかし、観察では、全ての生徒の活動状況を短時間で評価することは難しい。少しでも素早く判断ができるようにするためには、明確な評価基準を教員がもっている必要がある。そこで、評価基準を明確にする方法として「ルーブリック」を取り入れることが有効ではないかと考えた。

「ルーブリック」とは、成功の度合いを示す数段階程度の尺度と、尺度に示されたレベルのそれぞれに対応する特徴を記した記述語からなる評価基準であり、量的に判断しにくい複雑な評価項目の採点指針として用いられるものである。

また、ルーブリックを作成するためには、ねらいを明確にし、そのねらいが達成された生徒の状態を具体的に想定する必要がある。これは指導と評価の一体化を図るための第1段階（Plan）と一致する。本研究では、体育（ソフトボール、バスケットボール）と保健（健康の保持増進と疾病の予防）を取り上げ、思考力・判断力の育成を目指す授業展開の中で、ルーブリックを活用しながら評価を行い、課題を見出し、授業を改善する事例研究に取り組んだ。

ルーブリックの作成方法については、学習者をルーブリックの作成・発展および活用に巻き込むことを示している文献などが多い。しかし本研究では、まずは教員がすでに経験から思い描いている評価基準を明確にしたいと考え、作成は本研究に関わった3名のみで行った。その形式についても、授業を実施する教員が使いやすいかを第一に考えて作成した。

なお、通常評価はA「十分満足できる」、B「おおむね満足できる」、C「努力を要する」の3段階に分けられる。しかし本研究では、評価だけでなく、指導に生かすことに重点をおいてルーブリックを作成したため、段階が4、3、2、1の4段階となるようにした。ルーブリックの3がB「おおむね満足できる」、ルーブリック2、1がC「努力を要する」に該当するように各事例ともに設定した。



＜資料1＞文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査報告書」のデータより作成

事例 1 体育「ソフトボール」における指導と評価の工夫

1 生徒の実態及び事例のねらい

(1) 生徒の実態

本事例は、1年男子（計31名）を対象として実施した。なお、アンケートは同じ授業を行った1年男子全員（計91名）を対象に実施した。

研究校の生徒は、体を動かすことが好きな生徒が多く、授業では積極的に活動に取り組む。また、仲間意識も強く、運動を苦手とする生徒に対して、運動を得意とする生徒が助言をする姿も見られる。しかし、コミュニケーションをとることを苦手と感じる生徒も少なくない。

また、野球が盛んな地域であることから、野球部及び野球経験者が各クラスに4、5名ずついるため、ソフトボールの授業では中心となって活動している。

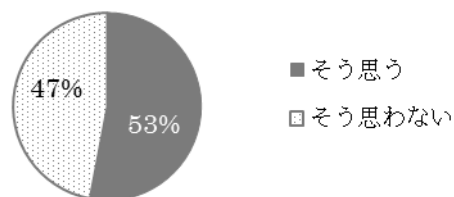
生徒の意識調査として、資料1の通り事前アンケートを実施した。「Ⅰ ソフトボールが楽しい」と答えた生徒は53%と約半数である。「Ⅳ 仲間と積極的に意見を交換したり、声をかけあったりしながらソフトボールに取り組んでいる」と答えた生徒は31%であるが、「Ⅲ バッティングの練習方法をチームで考えて練習したい」と83%の生徒が答えており、仲間とともに話し合いながら練習したいと思っている生徒が多いことが分かる。

<資料1 事前アンケート結果>

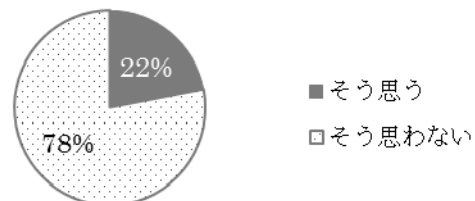
質問項目

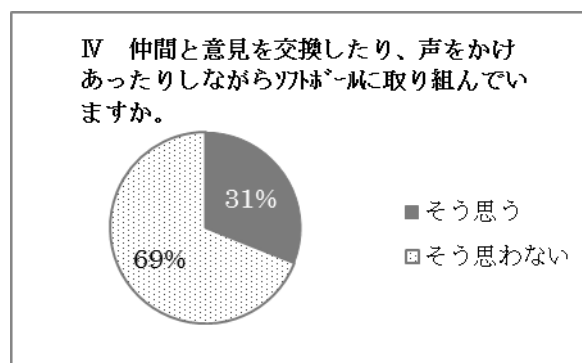
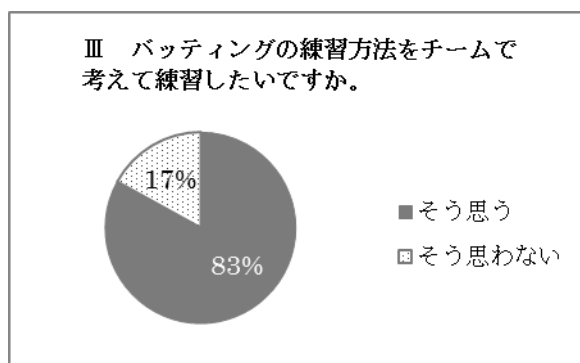
- Ⅰ ソフトボールは楽しいですか。
- Ⅱ バッティングの練習方法を考えられますか。
- Ⅲ バッティングの練習方法をチームで考えて練習したいですか。
- Ⅳ 仲間と積極的に意見を交換したり、声をかけ合ったりしながらソフトボールに取り組んでいますか。

Ⅰ ソフトボールは楽しいですか。



Ⅱ バッティングの練習方法を考えられますか。





(2) 事例のねらい

生徒は、授業の中で仲間と話し合いながら練習をしてみたいと思っている。集団スポーツであるソフトボールにコミュニケーションは不可欠である。主体的に仲間と関わりながら、十分なコミュニケーションを図って練習することによって、さらにソフトボールの楽しさを味わわせることをねらいとした。

ア 実践方法 1

生徒同士のコミュニケーションを活発にするために、教員主導の授業ではなく、仲間に対して技術的な課題を指摘し合ったり、有効な練習方法を選んだりする課題解決学習をグループで実施する。

生徒の思考を促すきっかけになるよう、生徒の動きを撮影したビデオを提供する。体育の授業の中で教員などが示範を示すことはよくあるが、生徒が自分の動きを見ることは少ない。自分の動きと他の人の動きを視覚的に比較することによって、違いを容易に感じるができる。視覚的に違いを理解することで、自分の動きに興味を持ち、生徒自ら課題に気付き、その解決方法を見付けやすくすることができると考えた。

イ 実践方法 2

ルーブリックを活用して指導と評価を一体化した授業をすることによって、グループでの学習活動の効果を検証しながら、より思考力・判断力を育むために有効なグループ学習を実施する。

2 単元の概要

(1) 単元名 球技「ベースボール型」ソフトボール

(2) 単元の目標

ア 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めてゲームが展開できるようにする。

- ・状況に応じたバット操作と走塁での攻撃、安定したボール操作と状況に応じた守備などを、仲間と連携して展開すること。

イ 球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。

ウ 技術などの名称や行い方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
①役割を積極的に引受け、自己の責任を果たそうとしている。 ②互いに助け合い、教え合おうとしている。 ③用具や練習場などの安全を確かめ、危険なプレーは行わないなど、自他の安全に留意している。	①グループ学習で、自己や仲間の技術的な課題に付き、有効な練習方法を選択している。 ②ゲームの場面で、提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。 ③作戦などの話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている。	①キャッチボール、バッティングの基本技能を身につけ、ボールをコントロールすることができる。 ②ゲームの中で、状況に応じたバット操作と走塁での攻撃ができる。 ③ゲームの中で、仲間と連携した守備などの動きができる。	①ソフトボールの特性、状況に応じた攻守について具体例を挙げている。 ②ルールを理解し、試合の行い方について言ったり書き出したりしている。

(4) 単元の指導計画並びに評価計画

時間	ねらい及び主な学習内容	評価の観点				評価の方法
		関	思	技	知	
1	【ねらい】 ・ソフトボールの特性やルール、授業の取り組み方を理解する。 【学習内容】 ・オリエンテーション 単元の学習内容やソフトボールの特性、練習方法などを理解する。 安全な活動方法について理解する。 ・ソフトボールの動きに関連した体力を高める運動を実施する。 ・簡易ゲームでルールを確認する。	③			②	観察
2 3	【ねらい】 ・仲間と協力して練習に取り組み、ソフトボールの基本技能を身に付ける。 【学習内容】 ・守備練習 捕球と送球、ゴロ・フライの打球処理 ・打撃練習 トスバッティング、プッシュバント、狙った方向へのバッティング	①② ①②				観察 観察

4	【ねらい】 ・互いに助け合いながら、課題解決に取り組む。 【学習内容】 ・キャッチボール（捕球と送球、ゴロ・フライの処理等）								
	・グループ学習 ビデオを見て、バッティングの自他の課題点等を確認し合う。 バッティングでボールをミートするための効果的な練習方法を グループごとに提案し、練習する。		①③						観察
5	【ねらい】 ・互いに助け合いながら、課題解決に取り組む。 【学習内容】 ・キャッチボール（捕球と送球、ゴロ・フライの処理） ・フリーバッティング								
	・グループ学習 流し打ち、遠くに打つ方法及びそれに対応した守備の確認。 遠くに打ったり、流し打ちをしたりするための効果的な練習方法 を、グループごとに提案し、練習する。		①③						観察
6	【ねらい】 ・ソフトボールの基本技能を身に付ける。 ・ソフトボールの特性に応じた攻守を理解する。 【学習内容】 ・様々な打ち方に対応した、守備を行う。 ・課題ゲーム ゲームの中で、犠牲バント、走塁、ヒットエンドラン、ダブルプ レイなどの戦術を確認する。 ・スキルテスト		①②				①		観察 観察 スキルテスト
8	【ねらい】 ・仲間と協力しながら、ソフトボールの楽しさを味わう。 ・チームで作戦を考えてゲームをする。 【学習内容】 ・ゲーム（リーグ戦） 審判は生徒が行う。 相手の攻防に応じた作戦を立てられるようにする。		③			②③	②		観察 観察 ワークシート

11	【ねらい】 ・ソフトボールの特性やルールを理解する。 ・チームの特徴に応じた作戦や戦術を選べるようになる。 【学習内容】 ・確認テスト 今まで学習した攻撃、守備などの基本的知識、ルール、戦術などを確認する。 ・ゲームの様子をビデオに撮影したものを見せ、状況変化の中での有効なプレイの選択を確認する。					
				②	確認テスト	
			②		確認テスト	

3 授業の様子

(1) 授業の展開①

11 時間中の第 4 時である。生徒の実態で述べたとおり、野球が盛んな地域であるため、同じベースボール型であるソフトボールの知識や技術についても、ある程度身に付いている生徒が多い。本時は、キャッチボールをした後、グループで、メンバーの課題を基に考えた練習（課題練習）を実施した。グループ学習中は事前に生徒のバッティングフォームを撮影したビデオを自由に見られるようにした。

この課題練習が評価の場面である。評価は観察で行い、評価基準としてルーブリック（資料 2）を活用した。授業の最後には自己評価シート（資料 3）で生徒に振り返りをさせた。この自己評価も評価の補助資料として活用する。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
展 開	○グループ学習 『バッティング課題に応じた練習方法を考えよう』 ・見本を見ながら、バッティングの基本動作及びボールをミートする方法の説明を聞く。 ・前時に撮影した自己のバッティングフォームをグループで確認し、課題点などを見付ける。 ・グループメンバーの課題を基に、ミート力を高めるための練習方法を提案し実施する。 ○振り返り ・自己評価シートで本時の反省をするとともに、次時への課題を明確にする。 ・何名か反省と課題を発表する。	・自己評価シートを配付し、最後に自己評価をすることを伝える。 評価基準【思考・判断】 自己や仲間の技術的な課題に気付き、有効な練習方法を選択している。（観察） 【支援】 ・必要に応じて、バッティングフォームを見るときのポイントを個別に説明する。 ・グループごとで考案した練習が具体化できるよう、助言する。 評価基準【思考・判断】 話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている。（観察） 【支援】 ・必要に応じて、仲間との協力の仕方などについて助言する。

<資料2 ルーブリック>

	ソフトボール【思考・判断】のルーブリック『バッティング課題に応じた練習方法を考えよう』			
	4	3	2	1
I バッ テ ィ ン グ 動 作 の 確 認	見本との違いを見付けることができる。 技能のポイントを見本との違いから見付けることができる。 個人の技能段階に応じたアドバイスを伝えられる。	見本との違いを見付けることができる。 技能のポイントを見本との違いから見付けることができる。	見本との違いを見付けることができる。	見本との違いを見付けることができない。
II 練 習 方 法 の 提 案	学習してきた練習方法から、効果的な練習方法を選択できる。 また、その理由を述べるができる。	学習してきた練習方法から、効果的な練習方法を選択できる。	効果的な練習方法が分からない。	効果的な練習方法が分からない。
III 仲 間 と の 関 わ り	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。 チームメイトと意見交換をし、課題練習の実施に向けて合意形成できる。 チームで合意形成した意見を基に、率先して自分の役割を見付け、行動し、練習することができる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。 チームメイトと意見交換をし、課題練習の実施に向けて合意形成ができる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができない。

思考・判断の評価規準「自己や仲間の技術的な課題に気づき、有効な練習方法を選択している」のルーブリックは、「自己や仲間の技術的な課題に気づき」の部分、「I バッティング動作の確認」として作成し、「有効な練習方法を選択している」の部分「II 練習方法の提案」の場面として2段階に分けて作成した。「話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている」については「III 仲間との関わり」として作成した。

三つの観点で観察評価を行うことは難しいことが予想されたため、IとIIの評価をできるだけ同時にしないで済むよう、Iのバッティングの動作の確認が済んでからIIの練習方法を考えるよう生徒に指示をした。

また、生徒と評価規準を共有して授業を行うために、ルーブリックの配付を検討した。しかし、説明に時間がかかると考え、生徒用には、内容を簡単にした自己評価シートを作成し使用した。

<資料3 自己評価シート>

自己評価シート
「バッティング課題に応じた練習方法を考えよう」

年 組 番 氏 名 _____

できたものに○をつけなさい。

- 1 見本を見て、正しいバッティングフォームを理解できる。
- 2 見本との違いをみつけることができる。
- 3 個人の技能の違いを理解できる。
- 4 個人の技能段階に応じたアドバイスを考えられる。
- 5 学習してきた練習方法から、効果的な練習方法を選択できる。また、その理由も伝えられる。
- 6 ミート力を上げる練習方法を、自分たちに適した方法に発展させることができる。
- 7 自分の考えを言葉や動きで示すことができる。
- 8 チームと意見交換し、意見の折り合いをつけることができる。
- 9 学習を振り返り、今後の課題を洗い出すことができる。
- 10 今後の課題に対しての改善策を考えられる。

(2) 評価の様子

ア ルーブリック 4 の評価

	ルーブリック	生徒の言葉および仲間との関わり	該当人数
評価 4	I	「見本と腰の動かし方が違ってる。早いタイミングでバットを回すからミートしないんだ。あとはボールを最後まで見てない。まずは、ボールがバットに当たるまでしっかり見たらどうかな。」（仲間に対してのアドバイス）	4
	II	「トスバッティングもいいけど、フォームを意識するためには、まずボールが止まっているところから始めた方がいいんじゃないかな。何か使って置いてあるボールを打てるようにしましょう。」	14
	III	率先して意見を出し、また仲間の意見を聞き出したうえで合意しようとしている。さらに行動面でも、練習がスムーズに実施できるよう率先して動き仲間にも指示をだしている	8

観察評価から、それぞれの項目で評価 4 と判断した生徒の発言や行動は左の表の通りである。

「I バッティング動作の確認」では 4 名の生徒が該当した。普段の授業の様子からは、もっと多くの生徒がアドバイスし合うことを予想していたが、実際には少数だった。

「II 練習方法の提案」では、グループ学習を始めたばかりのときは、練習方法を提案しても、その理由を明確にして提案できる生徒は少なかった。しかし、話し合いの最中に自己評価シートの見直しをさせたところ、活発に意見を出し、理由も伝えながらの会話が 많아 なった。

「III 仲間との関わり」で評価 4 に該当した 8 名には、「もっと仲間の意見を引き出せるように、また仲間のいい面を生かして活動ができるようにするには何をするとよいか考えよう」と伝え、さらなる目標をもたせた。

イ ルーブリック 3 の評価

	ルーブリック	生徒の言葉および仲間との関わり	該当人数
評価 3	I	「自分はボールがまだきてないのにバットを振ってる。〇〇は左足を出すときはまだバットは引いてるんだな。自分は左足を出しながらももう振ってるから早くなっちゃうことが何か関係があるのかな。」	20
	II	「素振りがいいと思う。」 「前にやったトスバッティングやろう。」	14
	III	率先して意見を出し、また仲間の意見を聞き出したうえで合意しようとしている。 行動面では、目立った動きはない。	10

観察評価から、それぞれの項目で評価 3 と判断した生徒の発言や行動は左の表の通りである。

「I バッティング動作の確認」で評価 3 となった生徒は 20 名であった。見本と自分の動作の比較から、技能のポイントを見付けることができた生徒は多かった。しかし、自分のことは考えられるが、仲間へアドバイスをすることができなかった。「間違ってもいいから思ったことをまず伝えてみよう。」などと助言してもほとんど変わらなかった。

「II 練習方法の提案」では、「ア ルーブリック 4 の評価」で述べたように、グループ学習の始めは評価 3 に該当する生徒が多かったが、授業の中で、練習方法を選

択した理由を伝えるようになったため、最終的には約半数の生徒が評価 4 となった。

「III 仲間との関わり」は三分の一程度の生徒が評価 3 であった。

ウ ルーブリック 2 の評価

	ルーブリック	生徒の言葉および仲間との関わり	該当人数
評価 2	I	「自分では見本と同じように打っているつもりなのに、何でこんな風に打っているんだろう。バットの動きがなんか違うよなあ。」	4
	II	「分からない。」 何も言わない。	3
	III	自分の意見を出すことはできる。 行動面では目立った動きはない。	11

観察評価から、それぞれの項目において評価 2 と判断した生徒の発言や行動は左の表の通りである。

「I バッティング動作の確認」で評価 2 に該当する生徒は何かが違うことは分かるが、改善するためのポイントが分からず、全てを見本と同じようにしようと考えている生徒が多かった。そこで「一度に何点も改善しようとしなくて、1 点ずつに絞って改善していこう。」と助言した。すぐには技能のポイントまでは見付けられなかった

が、バッティング動作を分解して考えてみようとする姿勢がみられた。

「II 練習方法の提案」に該当した生徒は、バッティング動作の改善点が分からないので練習方法も分からないという生徒だった。

「III 仲間との関わり」では自分のことを話すことと、相手の意見を引き出したりまとめたりすることの間には壁があるようで、助言をしても変容はみられなかった。

なお、教員の観察では評価 2 だった生徒の中に、自己評価では評価 3（チームメイトと意見交換し、合意形成できる）とした生徒が数名いた。

エ ルーブリック 1 の評価

	ルーブリック	生徒の言葉および仲間との関わり	該当人数
評価 1	I	「違うと思うけど、よく分からない。」 「（違いがあるが）同じだと思う。」	2
	II	「分からない。」 何も言わない。	(3)
	III	「分からない。」くらいしか言わない。 行動面では、仲間の指示があって始めて動く。	2

評価 1 と判断した生徒の発言や行動は左の表の通りである。

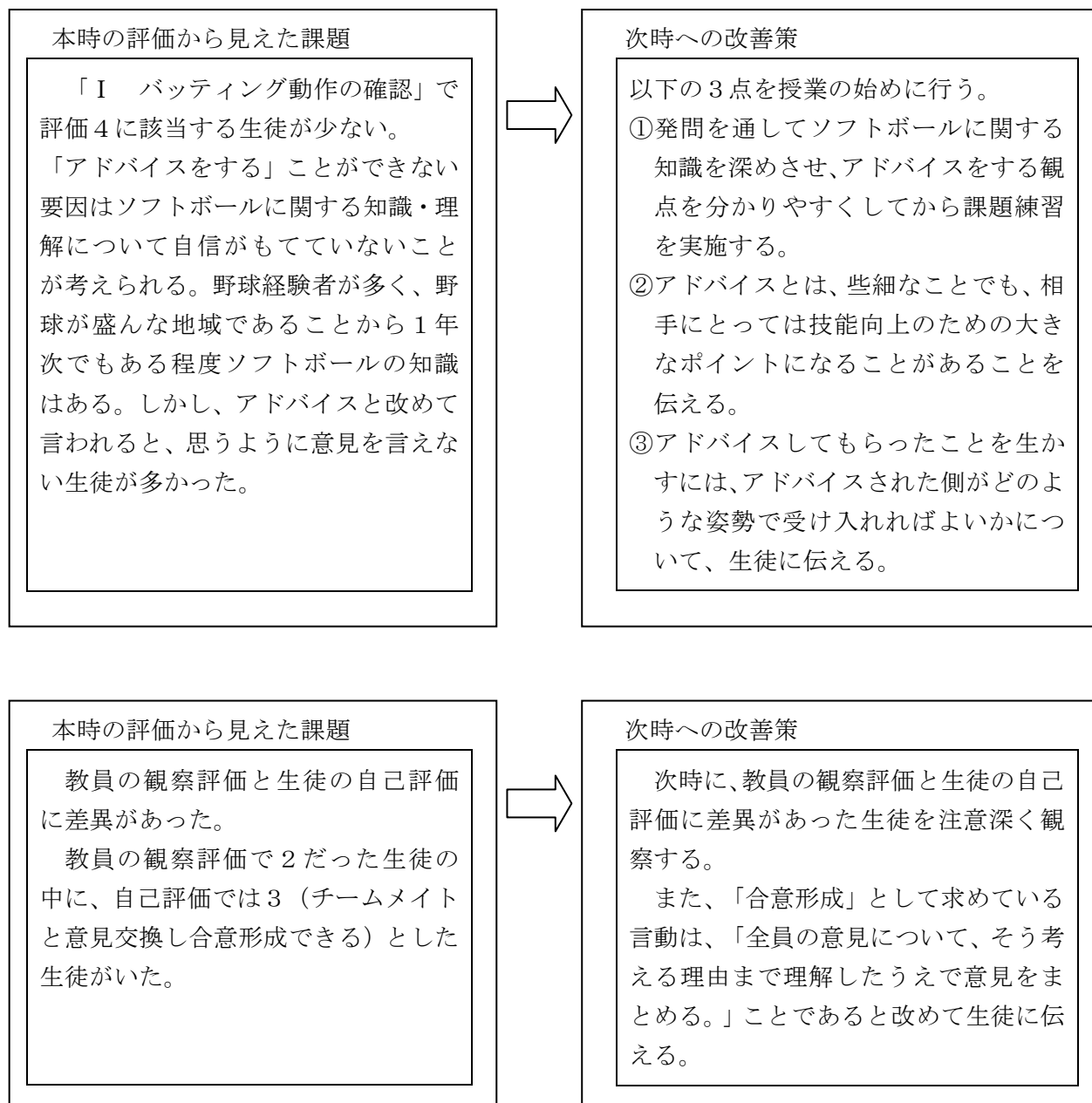
「I バッティング動作の確認」「II 練習方法の提案」「III 仲間との関わり」全て評価 1 に該当する生徒が 2 名いた。
バッティング動作を分解して、そのポイントを助言しながら一緒に考えることで、生徒は少し発言をすることができた。さらに、同じグループの全員に、みんなで考えて、みんなで動くことを強調した。

意見を求められたり、動くのを周囲が待ってくれたりする場面ができることで、自分から何かしなければという意識が少しできたようであった。



「授業の様子（ビデオでの観察）」

(3) 評価から見た授業の改善点

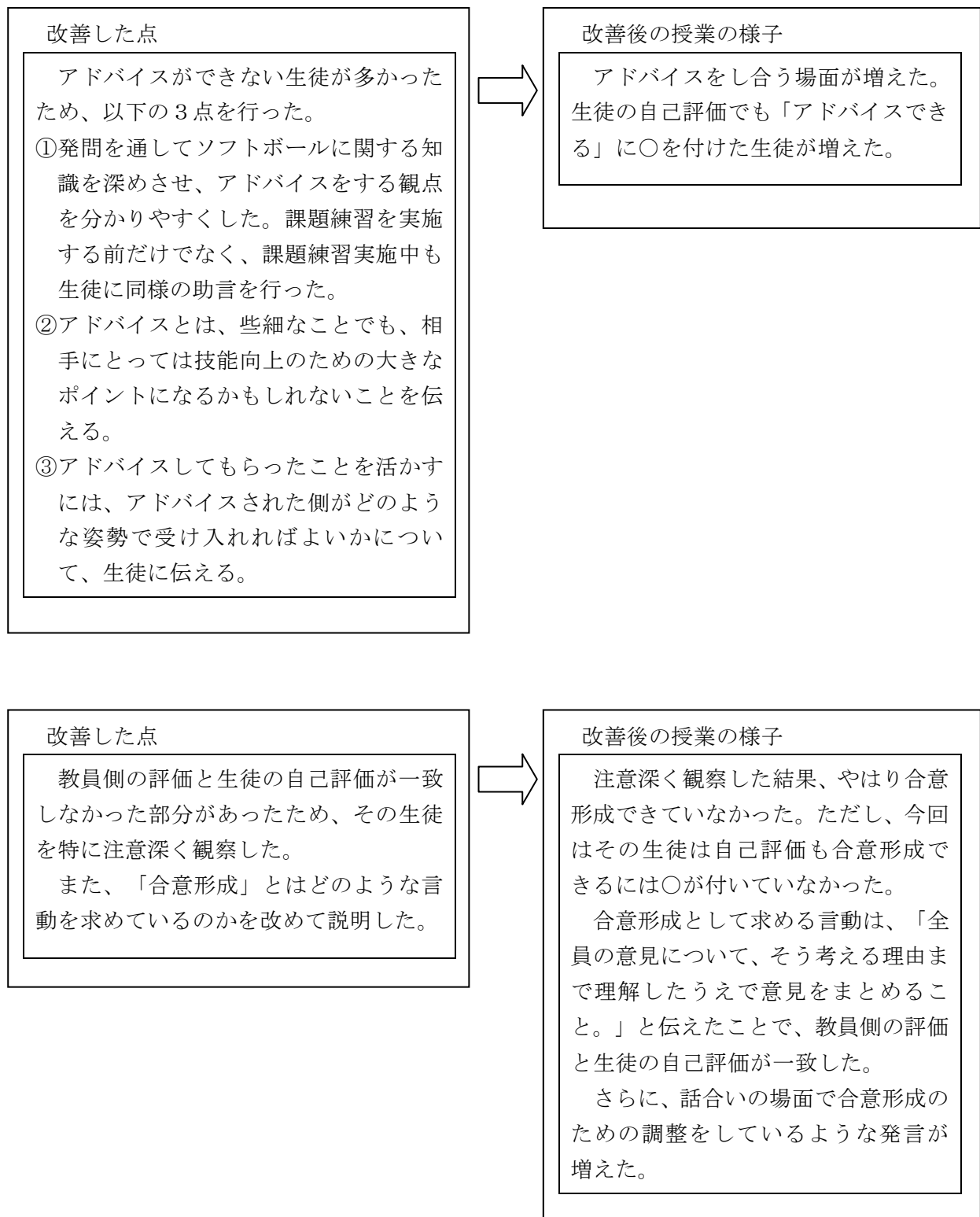


(4) 授業の展開②

11 時間中の第 5 時である。キャッチボールをした後、流し打ちなどについて説明し、グループで課題練習を実施した。課題は「流し打ち及び遠くに打つことができるように練習をしよう」である。

前時の反省から、授業の始めに「アドバイスは、些細なことでも相手にとっては大きなきっかけになることもある。」「アドバイスされる側の姿勢によって、アドバイスを自分に生かすこともできるし意味のないものにしてしまうこともある。」ことを伝えた。また「良いアドバイスをたくさんもらえる人と、あまり人からアドバイスをしてもらえない人がいる。」この理由について考えさせた。グループ学習では、知識を深めるための発問を、見本と自分の比較から改善点を探る際の思考の流れに沿うように実施した。このグループ学習が評価の場面である。ルーブリックと自己評価シートは前時と同じものを使用した。

(5) 前時から改善した点について



4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 評価を基に授業内容の改善を図ることでグループ学習がより活発になり、コミュニケーション力を向上できたこと

グループ学習の生徒の様子は、授業の展開①よりも展開②の方がより活発な話し合いがなされていた。後に行ったゲームでも、自然にチームで作戦を考え合う姿が見られた。自分たちで考えた作戦で、思う通りのプレイができたときの生徒たちの様子は、とても楽しそうであった。

特筆すべき点は、生徒たちが話し合う様子に変化したことである。以前は特定の生徒が話し合いをリードして、意見を言う生徒と言わない生徒に分かれる傾向があった。しかし現在は、話し合いをリードする生徒は、みんなの意見をまずは聞き入れようという姿勢になっている。さらにあまり意見を言わなかった生徒も、自分のアドバイスを仲間に受け入れてもらい、さらに感心されるなどの経験によって、少しではあるが自信を持って発言ができるようになってきている。

事後アンケート（資料4－Ⅲ）でも、「仲間と積極的に意見を交換したり、声をかけ合ったりしながらソフトボールに取り組んでいる」と答えた生徒が事前アンケートの31%から83%（そう思う＋ややそう思う）に増加している。ソフトボールが楽しいと答えた生徒（資料4－Ⅰ）も53%から増加し73%（そう思う＋ややそう思う）となっている。

イ ルーブリックによって評価が比較的容易にできたこと

評価の基準が明確になっていることで、観察で評価をする際も素早く判断をすることができた。ルーブリックをもっているということだけでなく、ルーブリックを作成する段階で生徒の学習状況をイメージしたことによって、基準に当てはめることが容易となった。また、この明確な生徒のイメージによって、話し合い活動中の言葉だけでなく、練習中の生徒の動きや、かけ合っている言葉などからも考えていることを見取ることができた。

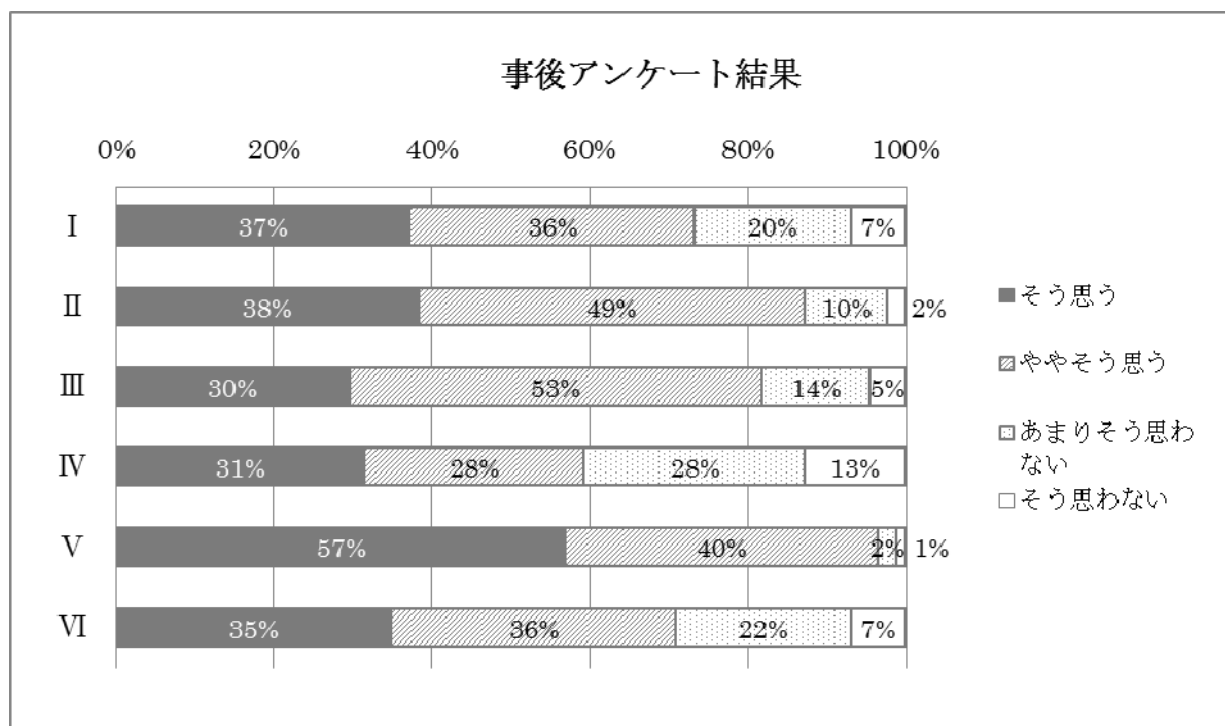
ウ 自己評価シートを生徒にも示すことで、生徒個々の目標が明確になったこと

ルーブリックの内容を基に生徒が自己評価することによって、生徒が学習の目標を理解しやすくなった。事後アンケート（資料4）でも、「自己評価シートを見ることでさらにどんなことを考えればよいかヒントを得られたか」（そう思う＋ややそう思う）97%、「自分の学習を振り返るのに役立ったか」（そう思う＋ややそう思う）71%となっている。自己の学習を振り返り、見通しを持つことができたことが分かる。学習を通して目指す具体的な姿を生徒に示し自己評価をさせることは、評価に役立つだけでなく、生徒を次の段階へ進めるための教員の手立てのひとつになり得る。

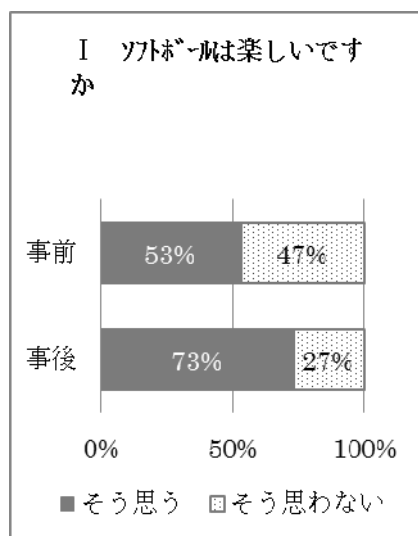
<資料4 事後アンケート結果>

質問項目

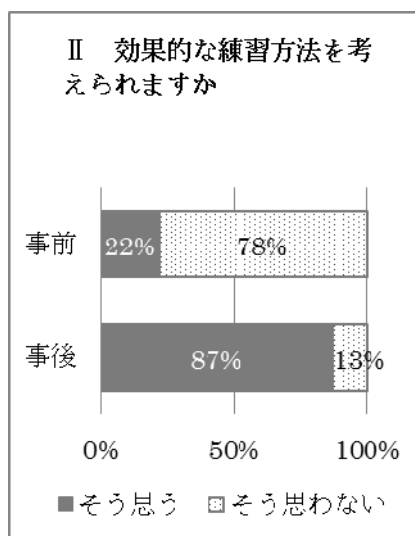
- I ソフトボールは楽しいですか。
- II バッティングの効果的な練習方法を考えることはできますか。
- III 仲間と積極的に意見を交換したり、声をかけ合ったりしながらソフトボールに取り組んでいますか。
- IV チームメイトの技術について、授業前と比べてアドバイスをすることができるようになりましたか。
- V 自己評価シートを見ることで、さらにどんなことを考えれば良いかヒントを得られましたか。
- VI 自己評価シートは自分の学習を振り返るのに役立ちましたか。



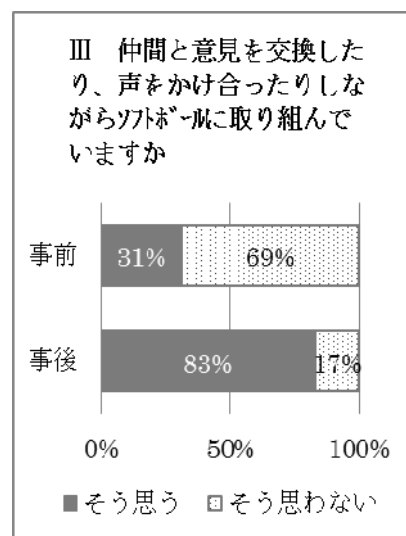
<資料 4—I>



<資料 4—II>



<資料 4—III>



(2) 課題

本事例の課題として、次のようなことが挙げられる。

ア 授業中の評価と指導のバランスが評価に偏ってしまったこと

成果の「イ」で、ループリックで評価が比較的容易になったと述べた。これまでよりも容易にできたことは確かであるが、授業中に評価することに追われて、評価内容以外の生徒の活動状況をよく見るができなかった。今回はループリックで三つの観点を評価したが、今後はより精選する必要がある。

イ 生徒同士でアドバイスし合うことがまだ十分ではないこと

授業の展開①での課題としてアドバイスができないことが挙げられた。授業内容の工夫によって改善されたが、まだ十分とは言えない。事後アンケートでも、「授業前と比べて、アドバイス

することができるか。」（そう思う＋ややそう思う）59％と、最も数値が低かった。課題を発見したり、理解することはできても、そのことを相手に伝えたり、アドバイスに発展させることは、かなり難しいことが分かる。こういったことは、簡単に身に付くことではない。年間を通して、計画的に指導の機会を設けていくことが必要である。

事例 2 体育「バスケットボール」の指導と評価の工夫

1 生徒の実態及び事例のねらい

(1) 生徒の実態

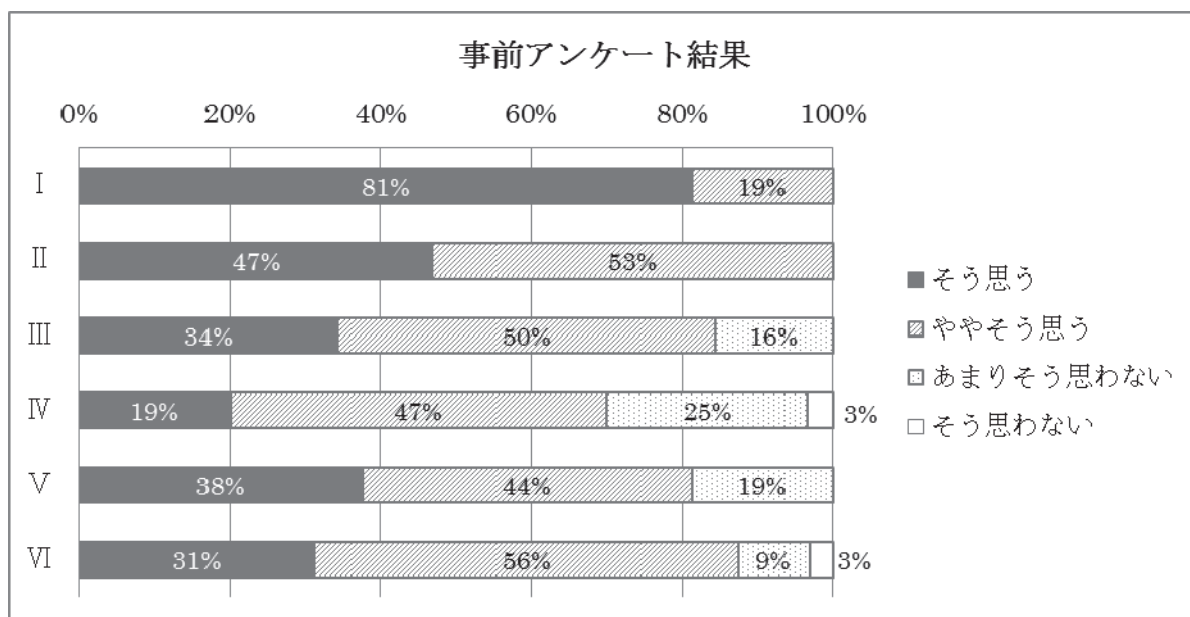
本事例は、球技選択でバスケットボールを選択している1年生25名（女子15名、男子10名）を対象として実施した。

研究校生徒は体を動かすことが好きな生徒が多く、体育の授業にも積極的に取り組む。本校のバスケットボールの授業は、球技選択種目の中の1種目として実施している。そのため、選択者には元々バスケットボールが得意であったり、好きであったりする生徒が多い。事前アンケート調査（資料1）でも、「バスケットボールの授業は楽しい」と答えた生徒は100%（「そう思う」81%＋「ややそう思う」19%）であった。その他の質問項目のうち、最も結果が低かったのは「チームの作戦や戦術を考えることはできますか」という項目である。作戦や戦術を考えられると答えた生徒は66%（「そう思う」19%＋「ややそう思う」47%）である。「楽しい」と答えた生徒の割合と比較すると、考えながら動くことの楽しさには、まだ気付いていない生徒が多いことが分かる。

<資料1 事前アンケート結果>

質問項目

- I バスケットボールの授業は楽しいですか。
- II 自分の課題を把握し、目標を持って授業に取り組んでいますか。
- III 仲間（チーム）の課題を把握し、目標を持って授業に取り組んでいますか。
- IV チームの作戦や戦術を考えることはできますか。
- V 仲間（チーム）に自分の考え（バスケットボールに関すること）を伝えることができますか。
- VI バスケットボールを、今後生涯スポーツとして実施したいですか。



(2) 事例のねらい

多くの生徒に、考えながらスポーツをする楽しさに気付いてもらいたい。ただ体を動かすだけでなく、作戦や戦術などを考えながら動くことで、体育の目標でもある「運動の楽しさや喜び」をより深く味わわせることをねらいとした。

ア 実践方法 1

作戦を立てたり、状況に応じた仲間と連携した動きを考えたりする場面を設定する。仲間との連携を図るために、チームを固定しチームで考えさせる。また、バスケットボールの経験者ではなくても、作戦などを考えやすくするために、状況を限定した課題を提供する。さらに、その課題を解決するための技能や知識を十分に高められるように単元計画を作成する。

イ 実践方法 2

ループリックを活用して指導と評価を一体化した授業をすることによって、チームでの学習活動の効果を検証しながら、より思考力・判断力を育むために有効な学習を実施する。

2 単元の概要

(1) 単元名 球技「ゴール型」バスケットボール

(2) 単元の目標

ア 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めてゲームが展開できるようにする。

- ・安定したボール操作と空間を作り出すなどの連携した動きによってゴール前への進入などから攻防を展開すること。

イ バスケットボールに自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする事、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとする事などができるようにする。

ウ 技術などの名称や行い方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解しチームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
①互いに助け合いながらチームの一員として貢献しようとしている。 ②勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとしている。	①自己のチームや相手チームの特徴を踏まえ、相手の守備や攻撃に対して有効なプレーを選んでいる。 ②作戦などの話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている。	①基本技術を身に付け、安定したボール操作ができる。 ②仲間と連携し、空間を作り出すなどの動きができる。	①技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ②ルールや審判の仕方を理解し、言ったり書き出したりしている。

(4) 単元の指導計画・評価計画

時間	ねらい及び主な学習内容	評価の観点				評価方法
		関	思	技	知	
1	【ねらい】 ・バスケットボールの特性やルールを理解する。 ・学習の見通しを立てる。 【学習内容】 ・オリエンテーション バスケットボールの特性や練習方法、ルール等を理解する。 ・自己の基本技能の確認練習 現在の自己の技能を把握し、課題を設定する。				①	観察
2 3 4 5 6 7 8 9 10	【ねらい】 ・安定したボール操作と空間を作り出すなどの連携した動きができるようにする。 ・互いに助け合い、高め合って練習できるようにする。 【学習内容】 ・安定したボール操作の練習 パス練習（2人組ドリル、スクエアパス など） ドリブル練習（サークルドリブル鬼ごっこ など） シュート練習（ゴール下のシュート、ドリブルレイアップシュート、ドリブルジャンプシュート など） ・状況に応じて仲間と連携してのボール操作の練習 パス回し3対1、3対2 アウトナンバーの状態を活かしてシュートできるようにする。（ハーフコート2 on 1・3 on 2） アウトナンバーから通常の状態でも空間を作り出せるようにする。（ハーフコート2 on 2・3 on 3） ・簡易ゲーム ルールや審判法、フォーメーションなどについても再確認する。 ・スキルテスト			①	①	観察
		①		②		観察 ワークシート
		①		①	②	観察 ワークシート スキルテスト
11 12	【ねらい】 ・チームとして連携した攻防ができるようにする。 【学習内容】 ・シュート練習 ・パス回し					
		授業の展開				
・ハーフコート5対5（ゲームをしながらチームで考える時間を設ける） 提示されたディフェンス及びオフェンスの課題に対して、戦術や作戦をチームで検討する。			①②			観察 ワークシート

13	【ねらい】					
14	・互いに助け合いながら、協力してゲームに取り組み、勝敗を競					
15	う楽しさや喜びを味わうことができるようにする。					
	・作戦や戦術を工夫してゲームをする。					
	【学習内容】					
	・試合の計画・運営（リーグ戦）	①②		②	②	観察
	約束事を確認して、正規に近いルールで安全に試合ができるよ					
	うにする。					
	チームや個人の課題を設定し、相手チームに応じた作戦を立て		①②			観察
	て試合ができるようにする。					ワークシート

3 授業の様子

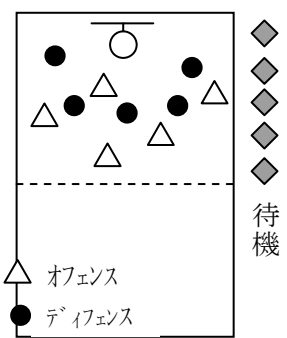
(1) 授業の展開

15 時間中の第 11 時である。安定したボール操作ができるよう、基本練習を積み重ねてきたため、ほとんどの生徒の技能が向上している。また、課題を解決するために重要な、空間を意識した練習やフォーメーションについての学習なども行ってきた。本時は、ハーフコート 5 対 5 のゲームをしながら課題解決学習に取り組みさせた。課題は「相手選手をゴール下に進入させないためにはどうすれば良いか」である。最終的な目標は「チームメイトの長所を生かした作戦や戦術を考える」ことであるが、考えるポイントを絞ることで、バスケットボール経験者ではなくても、授業で学んできた内容を基に考えられるようにした。

評価にはループリック（資料 2）を活用した。思考・判断の評価規準「自己のチームや相手チームの特徴を踏まえて、相手の守備や攻撃に対して有効なプレーを選んでいる」については、生徒が思考する段階での大きなポイントが 2 点あると考え、「Ⅰ 現状分析」と「Ⅱ 作戦・戦術の提案」の二つの段階に分けてループリックを作成した。もう一つの評価規準「作戦などの話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている」については、「Ⅲ 仲間との関わり」として作成した。なお、「Ⅰ 現状分析」の 4 に記載してある（味方や相手チームの長所と短所が分かる）は該当しなくてもループリックの 4 と評価できるが、最終的な目標である「チームメイトの長所を生かした作戦や戦術を考える」ために重要な事項として加えた。

授業の最後に、生徒に振り返りとしてループリックを配布して自己評価をさせた。この自己評価も評価の補助資料として活用する。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
展	○シュート練習 ・ドリブルジャンプシュート ・ドリブルレイアップシュート ○パス回し（3 対 2）	・ゲームに活用することをイメージしながら練習させる。 ・相手が取りやすいパスを意識させる。

開	○ハーフコート5対5のゲーム 課題『相手選手をゴール下に進入させないためにはどうすれば良いか』  ・女子は5人のチームを3チーム編成する。 男子は3人のチームを2チーム、4人のチームを1チーム編成する。 ・オフェンスチーム、ディフェンスチーム、待機チームを決める。 ・オフェンスチームが3ゴールするか、ディフェンスチームがボールを3回奪うまで攻防を続ける。 ・攻防が終わったら、オフェンスチームはディフェンスに、ディフェンスチームはコート外で待機、待機チームはオフェンスにローテーションする。 ・待機中に課題についてチームごとに考える。 ・ゲーム終了後に反省及び自己評価をする。	・「現状分析」「作戦・戦術の提案」「仲間との関わり方」について意識して考えて話し合うよう伝える。 評価規準【思考・判断】 ①自己のチームや相手チームの特徴を踏まえて、相手の守備や攻撃に対して有効なプレイを選んでいる。（観察、ワークシート） ②作戦などの話合いの場面で、合意形成をするための適切な関わり方を見付けている。（観察） ・ワークシートにチームの意見を記入させる。 ・ゲーム終了後の反省は、各チームできるだけ近くで話し合わせて、他チームの意見を聞くことができるようにする。
---	---	---

＜資料2 ループリック＞

	バスケットボール【思考・判断】のループリック『チームで作戦や戦術を考える』			
	4	3	2	1
I 現状分析	自分以外の人シュートを打つ前後に、自分が何をしているか分かる。 ゲーム中に味方や相手がどう動いているか分かり、その理由も説明できる。 （味方や相手チームの長所と短所が分かる。）	自分以外の人シュートを打つ前後に、自分が何をしているか分かる。 ゲーム中に味方や相手がどう動いているか分かる。	自分以外の人シュートを打つ前後に、自分が何をしているか分かる。	自分以外の人シュートを打つ前後に、自分が何をしているか分からない。

Ⅱ 作戦・戦術の提案	課題をクリアするために、ゲームの中で自分がどう動いたらよいか考えられる。 課題をクリアするために、自分とチームメイトがどう連携して動いたらよいか考えられる。 課題をクリアするための連携した動きを、一つだけでなく、複数のパターンで考えられる。	課題をクリアするために、ゲームの中で自分がどう動いたらよいか考えられる。 課題をクリアするために、自分とチームメイトがどう連携して動いたらよいか考えられる。	課題をクリアするために、ゲームの中で自分がどう動いたらよいか考えられる。	課題をクリアするために、ゲームの中で自分がどう動いたらよいか考えられない。
Ⅲ 仲間との関わり	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。 チーム全員の意見を踏まえたうえで意見交換をし、チームの作戦・戦術（課題）について合意形成できる。 チームの方針を基に、ゲーム中やゲーム前後にチームメイトに声をかけたり動きの支持を出したりすることができる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。 チーム全員の意見を踏まえたうえで意見交換をし、チームの作戦・戦術（課題）について合意形成できる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができる。	自分の考えを言葉や動きで示すことができない。

(2) 評価の様子

ア ルーブリック「Ⅰ 現状分析」の評価

課題「相手選手をゴール下に進入させないためにはどうすれば良いか」については、現状分析をしなくても解答することができる。しかし、自己や仲間に結び付けて考えるために、話合いの際に、自分と仲間の動きを振り返り、仲間に伝えてその情報を基に課題について考えるよう指示をした。

評価1に該当する生徒が1名いた。改めて自分が何をしているのか考えようとしても、想像できずに戸惑っていた。その生徒をゲーム中に観察すると、シュート時に何もしていない生徒だった。一緒に振り返って思い出させると、他の人がシュートをする際に自分が何かをするという意識がないために自分の動きも思い出せなかったことが分かった。

評価2に該当する生徒は、7名だった。相手や仲間がどう動いているかはよく分からないと話していたが、この話合いをすることによって、他の人の動きを意識するきっかけになったようであった。

評価3に該当する「相手や仲間がどう動いているかは分かるが、その理由までは説明できない」という生徒が約半数の12名いた。ディフェンスのポイントを簡単に説明して思い出させ、ボールを持っている人の視点から見ると、その動きによって何がかわるか話し合わせた。この話合いをすることによって、評価1の生徒もボールを持っていない時の動きの重要性に気付くことができたようであった。しかし、動きのイメージをつかむことは難しいようであった。

評価4の5名の生徒はバスケットボール経験者など技能レベルの高い生徒たちだったので、自分のレベルでプレイをしようとするのではなく、みんなの良いところを引き出す方法を考えるよう促した。

イ ルーブリック「Ⅱ 作戦・戦術の提案」の評価

この話合いの場面では、意見を出す生徒と出さない生徒の差が大きくなってしまった。評価も4と2に分かれる結果だった。評価4の生徒は資料3のように、チームの作戦や戦術を考え、そのための自分と仲間の動きについて説明していた。評価3の生徒はその話を聞いて、自分の動きを確認する程度であった。

ただ、話合いの観察評価で2だったが、ゲーム中の様子を見ると、話合いでは提案されていなかった仲間との連携した動きをしようとしている生徒がいた。その生徒は、自己評価では4と付けていた。そこで直接話をしたところ、経験者ではないので遠慮をしてしまったとのことだった。考えている内容については間違っていなかったのに、自信をもって次からは意見を言ってほしいと伝えた。

＜資料3 ワークシート＞

2 班

課題1「相手選手をゴール下に進入させないため、どうすれば良いか。」

- ・1人1人 マークする人も決めて、ボールを持っていない人とマークする人の間に立つようにする。
- ・上手な人と身長の高い人に ボールを持たせない。
- ・ゴール下に必ず2人はいて、ゴール下に入ってこようとする人をブロックする。

課題1への取組について反省

- ・マンツーマンディフェンスにしたけど、マークしきれなくて相手こう進入された。マンツーマンだといっていけない時も多かったので、今はゴール下に必ず2人はいるようにする。

課題2「ゴール下へパスを通す、ゴール下ヘドリブルで進入するためにはどうすれば良いか。」

- ・相手チームに進行の邪魔をさせないようにブロックする。
- ・パスをまわして相手のディフェンスをくぐらす(相手を動かしてゴール下に空間を作る)
- ・パスをまわす時 声だして相手だかりで相手をも惑わす。
- ・パスでもドリブルでもフェイクもいれる。

課題2への取組について反省

- ・声をだすのはみんなできてよかった。プレーがスムーズになったと思う。もっとゴール下の相手を動かすために、ゴール下においてパスを回すようにする。フェイクがけっこう効果があったし、面白かった。
- ・〇〇にボールをもたせて相手を引きつけておいて、他の人にパスする。

ウ ルーブリック「Ⅲ 仲間との関わり」の評価

評価1に該当する自分の考えを示すことができない生徒はいなかった。評価2の生徒が6割以上になったが、理由として評価2の「チーム全員の意見を踏まえたうえで」という点が挙げられる。そこで、授業の最後に生徒が集合したときに、合意形成をするにはまず、チーム全員が何を考えているかを理解することが重要であること、そして、その点を次時の課題にしてほしいと伝えた。



「授業の様子（撮影）」



「授業の様子（動きの確認）」

(3) 評価から見た授業の改善点

課題 1

作戦・戦術の提案は、意見を出す生徒と出さない生徒の差が大きくなってしまった。

バスケットボールを経験していない生徒は、たとえ意見をもっているにもかかわらず遠慮して発言できないこともある。また、経験者がいれば自分は考えなくてもよいと思う生徒もいると思われる。

課題 2

動きのイメージをつかむことができない生徒がいた。

自分の動きは自分では見ることはできない。また、実際のゲーム中のように、動きが速いとイメージをつかむのは難しい。

改善策 1

話し合いのメンバーを編成し直す。

ループリック「Ⅱ 作戦・戦術の提案」で評価 4 だった生徒は別のグループにして話し合いをさせる。観察評価で 2、自己評価で 4 だった生徒はチームに残した。

話し合いが終わった後は、別グループにした評価 4 だった生徒をチームに戻して、それぞれ話した内容を伝え合わせた。

改善策 2

タブレットで撮影をして、自分たちの動きをスローで何度も振り返ることができるようにした。

改善後の様子 1

話し合いのグループから評価 4 の生徒が抜けることで、前時にはあまり意見を言わなかった生徒が意見を言ったり、グループの意見をまとめようとする姿が見られた。観察評価と自己評価に相違があった生徒も、今回は意見を積極的に述べて、グループのメンバーに頼りにされている様子であった。

評価 4 だった生徒たちのグループには、高度な別課題を与えたことで、楽しみながら考えることができていた。

改善後の様子 2

視覚的に何度も振り返ることができたので、動きのイメージをつかむことができた。また、自分の動きを見ることで、動いているつもりでも実際は意味のある動きになっていないことに気づき、修正点を見付けることができた。

評価が良かった生徒たちは、コートを客観的に見ることで、さらに空間を意識したプレイにもつながった。

4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 教員による評価と生徒の自己評価の相違から授業の改善策を見付けられたこと

生徒とルーブリックを共有することで、生徒の自己評価との相違が分かりやすかった。これにより、教員が授業の計画を修正し、次回以降の授業を改善していくことができた。

イ 評価別の個別指導の効果が不十分であったことから、授業の改善策を見付けられたこと

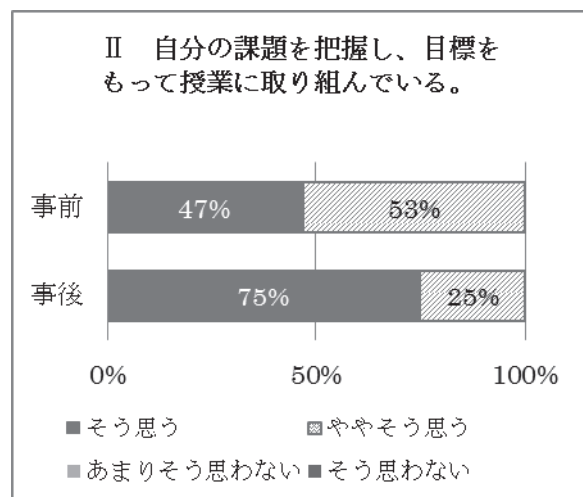
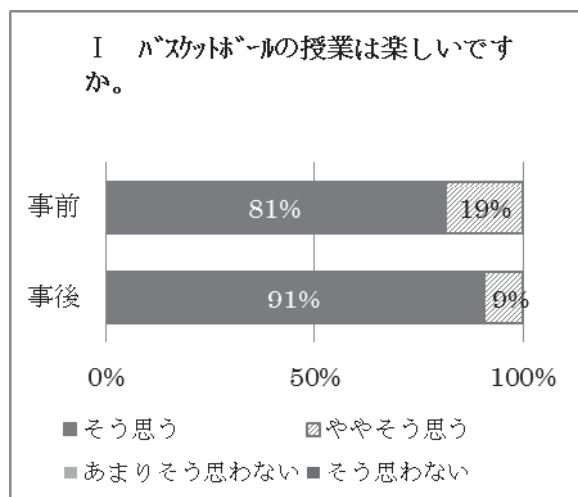
授業中に評価をして個別指導を実施した。ルーブリックで評価基準が明確になっていたため、その指導結果が十分なものではないことに気付くことができた。また、指導に何が足りないかも気付くことができ、改善策を見付けられた。

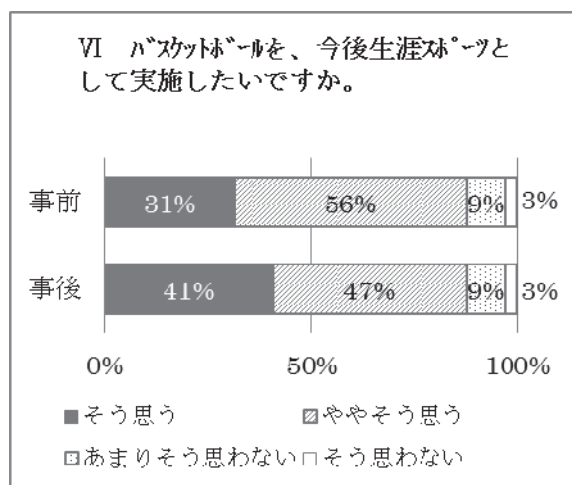
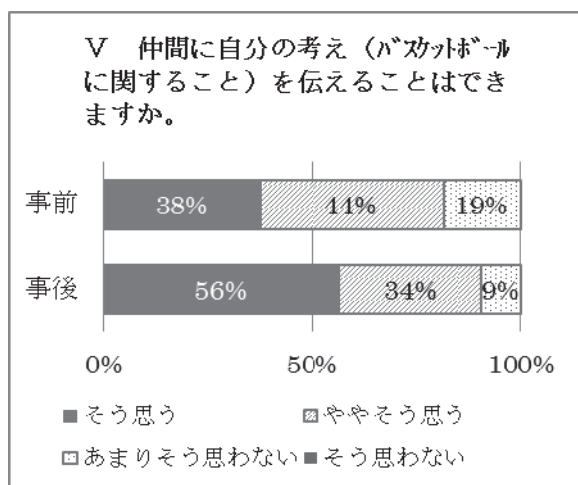
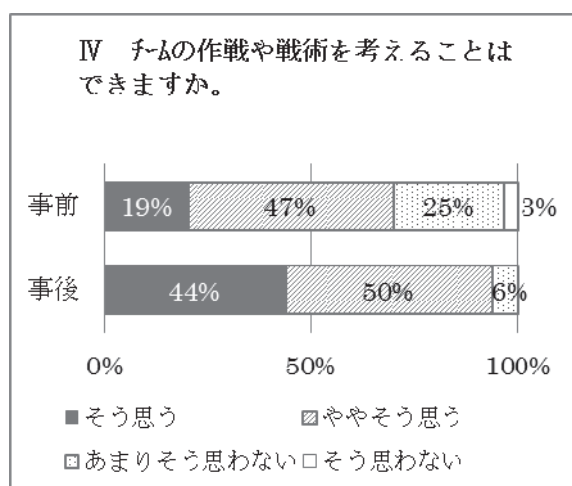
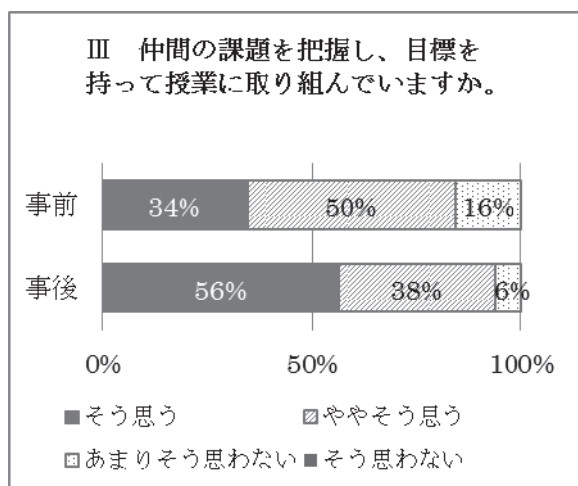
授業改善後の生徒たちは、より「考えながら動く」ことに焦点を当てて学習活動に臨むようになった。自分たちが考えたことがうまくいった時の喜びは非常に大きいものであり、またチームの一体感を生み出したようである。事後アンケート（資料4）でも、「I バasketボールの授業は楽しいですか」との問いに「そう思う」と答えた割合が81%から91%にわずかながら増加している。また、「IV チームの作戦や戦術を考えることはできますか」の問いも66%（「そう思う」19%＋「ややそう思う」47%）から94%（「そう思う」44%＋「おおよそそう思う」50%）に増加している。他の項目も事後アンケートの方が「そう思う」と答えた割合が増加しており、目標をもって、仲間とともに考えながら授業に取り組むようになってきていることを示している。

<資料4 事後アンケート結果>

質問項目

- I バasketボールの授業は楽しいですか。
- II 自分の課題を把握し、目標をもって授業に取り組んでいますか。
- III 仲間（チーム）の課題を把握し、目標をもって授業に取り組んでいますか。
- IV チームの作戦や戦術を考えることはできますか。
- V 仲間（チーム）に自分の考え（Basketボールに関すること）を伝えることができますか。
- VI Basketボールを、今後生涯スポーツとして実施したいですか。





(2) 課題

本事例の課題として、次のようなことが挙げられる。

ア 生徒の自由な発想を広げる方策の検討

今回の授業では、課題を限定して話し合いをさせた。考えるポイントを絞ることで、バスケットボール経験者でなくとも、授業で学んできた内容を基に考えられるようにした。広い課題をいきなり与えるよりも生徒の思考を促すうえでは有効であったと考える。しかし、限定することは、裏を返せば自由な発想を奪うことにも繋がりがかねない。あるチームが、資料5のように、課題に対する解答としては正解とは言えないが、作戦としては非常に面白いものを考えた。今後は生徒の自由な発想を広げていく方策も検討していかなければならない。

<資料5 ワークシート>

班

課題1「相手選手をゴール下に入らせないため、どうすれば良いか。」

- リバウンドを取ることか目的なので
進入させます。
- 身長の高い2人がゴール下に入ってリバウンドをとる。

課題1への取り組みについて反省

- 上手くいっていると思います!
- リバウンド以外でも相手かゴールをう前に
マイボールにしたいです!

課題2「ゴール下へパスを通す、ゴール下ヘドリブルで進入するためにどうすれば良いか。」

- さんのロックパス
- 3人でリバウンドをとって速攻でゴール下に入る

課題2への取り組みについて反省

- よくできました!
- パスがうなためので
もっとパスの量を増やした方がいいと思います。

イ 運動量の確保

50 分間の限られた時間内で、生徒に考えさせながら運動量を確保することの難しさを感じた。生徒たちの技能レベルや思考レベルが向上するにつれて、より精巧で高度な作戦を立案する必要性が生じてくる。その時間を確保すれば活動する時間が減り、十分な運動量の確保が困難になると予想する。短時間で効率よく生徒の思考・判断を促す手立てが今後の課題である。

事例3 保健「健康の保持増進と疾病の予防」の指導と評価の工夫

1 事例のねらい

本事例においては、「健康の保持増進と疾病の予防」の単元の「喫煙・飲酒と健康」について取り上げる。

高校生にとって喫煙や飲酒は興味を惹くものであり、身近な健康課題の一つである。喫煙や飲酒の防止については自らの実生活に則して考える必要がある。よって教科書の内容を理解するだけでなく、的確な思考・判断に基づいて適切な意思決定を行う力を身に付けさせることをねらいとした。

ア 実践方法1

思考力・判断力を育成するためには、自己の中だけで考えるのではなく、仲間の意見を受け入れ、さらに対話の中で思考を深め判断できるようになることも重要と考える。そこでグループ活動を取り入れ、生徒一人一人が学習内容について主体的に考え、判断することができる時間を設定した。

イ 実践方法2

ループリックを活用して指導と評価を一体化した授業をすることによって、グループ学習の効果を検証しながら、より思考力・判断力を育むために有効なグループ学習を実施する。

2 単元の概要

(1) 単元名 現代社会と健康 イ 健康の保持増進と疾病の予防

(2) 対象クラス 1 学年 40 名

(3) 単元の目標

ア 生活習慣病と日常生活行動、喫煙や飲酒と健康、薬物乱用に関する資料を探したり、見たり、読んだり、課題の解決に向けて話し合いや意見交換をしたりするなどの学習活動に意欲的に取り組もうとすることができるようにする。

イ 生活習慣病と日常生活行動、喫煙や飲酒と健康、薬物乱用に関する資料等で調べたことを基に課題を整理したり、学習したことを、個人及び社会生活や事例と比較したり、分析したりするなどし、筋道を立ててそれらを説明することができるようにする。

ウ 喫煙と飲酒、薬物乱用の心身への影響、健康の保持増進と生活習慣病の予防や、喫煙と飲酒、薬物乱用、感染症の対策には個人及び社会環境への対策が必要であることなどを理解することができるようにする。

(4) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
①生活習慣病と日常の生活行動について、課題の解決に向けた話し合いなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。 ②喫煙や飲酒と健康、薬物乱用と健康、感染症とその予防について、資料を探したり、見たり、読んだりするなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	①生活習慣病と日常の生活行動について、資料等で調べたことを基に、課題を見付け、解決の方法を整理するなどしてそれらを説明している。 ②喫煙について自分や周囲の人の生活行動を振り返り、喫煙防止のための方策を分析、整理し説明している。 ③喫煙、飲酒と健康、薬物乱用と健康、感染症とその予防について、個人及び社会生活や事例と比較したり、分析したり、評価したりするなどしている。また、筋道を立ててそれらを説明している。	①生活習慣病を予防し健康を保持増進するには、食事、運動、休養及び睡眠の調和のとれた生活を実践する必要があることについて、理解したことを発言したり、記述したりしている。 ②喫煙や飲酒は、生活習慣病の要因となり、個人や社会環境への対策が必要であることについて、理解したことを発言したり記述したりしている。 ③薬物乱用は、心身の健康や社会に深刻な影響を与えることから、決して行ってはならないことや、個人や社会環境への対策が必要であることについて、理解したことを発言したり記述したりしている。 ④感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いが見られること、その予防には個人及び社会的な対策を行う必要があることについて、理解したことを発言したり記述したりしている。

(5) 単元の指導計画・評価計画

時間	ねらいと学習活動	評価の観点			評価方法
		関	思	知	
1 生活習慣病と日常の生活行動	【ねらい】 - 生活習慣病の例を挙げることができ、生活習慣病の予防法を理解できるようにする。 【学習活動】 - 我が国の死因順位や疾患患者数の推移の背景について考える。 - 代表的な生活習慣病について理解する。 - 生活習慣病の予防法について理解する。				小テスト 発言
2 生活習慣病と日常の生活行動	【ねらい】 - 生活習慣病を予防し健康を保持増進するための食生活について、理解できるようにする。 【学習活動】 - 食事の意味について理解する。 - 健康的な食事のとり方を理解する。 - 自己のライフスタイルを振り返り、健康的な食生活について考える。	①	①		ワークシート 観察

3 生活習慣病と日常生活行動	【ねらい】 - 生活習慣病を予防し健康を保持増進するための運動と休養について、理解できるようにする。 【学習活動】 - 運動と休養の意味について理解する。 - 適切な運動と休養の取り方を理解する。 - 自己のライフスタイルを振り返り、健康的な運動と休養について考える。	①	①		ワークシート 観察
4 喫煙・飲酒と健康	【ねらい】 - 喫煙や飲酒は生活習慣病の要因になることを理解できる。 - 喫煙や飲酒を防止するための、個人及び社会環境への対策について理解できる。 【学習活動】 - たばこの煙に含まれる有害物質の健康への影響を知る。その際、周囲の人々や胎児への影響にも理解する。 - アルコールの作用や健康への影響を理解する。 - 飲酒、喫煙による健康問題に対する個人や社会環境への対策にはどのようなものがあるか理解する。インターネット等で自分で調べてまとめる。	②		②	ワークシート ワークシート 観察
5 喫煙・飲酒と健康	【ねらい】 - 自分自身や周囲の人の生活行動を振り返り、社会生活や事例と比較分析することで、喫煙防止のための有効な対策を考える。 【学習活動】 - 喫煙による健康影響や、喫煙防止のための社会的対策について前時の復習をする。 - 喫煙開始のきっかけとなることはどのようなことかを推測する。				授業の展開①
	身近な人の喫煙をやめさせる方法を考える。（グループ学習）		②		ワークシート 観察
6 喫煙・飲酒と健康	【ねらい】 - 飲酒・喫煙と健康について、学習したことを基に、個人及び社会生活や事例と比較分析したり、評価したりできるようにする。さらに、それらを筋道を立てて説明できるようにする。 【学習活動】 - 飲酒・喫煙による健康被害や、社会的対策についての復習をする。 - 飲酒・喫煙開始のきっかけとなることはどのようなことかを理解する。				授業の展開②
	喫煙や飲酒に対する社会的対策は有効かについて話し合うことを通して、個人が社会に貢献できることを考える。（グループ学習）		③		ワークシート 観察

7 薬物乱用と健康	【ねらい】 ・薬物乱用は決して行ってはならないこと、個人や社会環境への対策が重要であることを理解できるようにする。 【学習活動】 ・主な乱用薬物とその健康への影響について理解する。 ・薬物乱用防止の対策について理解する。 ・薬物依存と薬物がもたらす社会問題について調べ、整理する。インターネット等で、自分で調べる。	②	}	③	ワークシート ワークシート
8 感染症とその予防	【ねらい】 ・感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いが見られること、その予防には個人及び社会的な対策を行う必要があることについて理解できるようにする。 【学習活動】 ・世界における主な死亡原因を調べ、その理由を考える。 ・新興感染症や再興感染症の発生や流行について理解する。 ・感染症（性感染症、エイズを除く）の予防対策について理解する。		}	④	小テスト 発言
9 感染症とその予防	【ねらい】 ・感染症の中の性感染症やエイズの特徴を理解できるようにする。 ・性感染症やエイズの、個人及び社会環境への対策を理解できるようにする。 【学習活動】 ・性感染症の感染者数が、若い年代に多い理由を考える。 ・性感染症やエイズの特徴について理解する。 ・性感染症、エイズの個人及び社会的対策について理解する。		}	④	小テスト 発言
10 感染症とその予防	【ねらい】 ・感染症と健康について、学習したことを基に、個人及び社会生活や事例と比較分析したり、評価したりできるようにする。さらに、それらを筋道を立てて説明できるようにする。 【学習活動】 ・性感染症やエイズ感染を防ぐための予防キャンペーンの企画を考える。	②	③		ワークシート 発表

3 授業の様子

(1) 授業の展開①

10 時間中の第5時である。高校生にとって、喫煙や飲酒は身近な健康問題の一つである。そこで、自分自身や周囲の人の生活行動を振り返り、社会生活や事例と比較分析することで、喫煙防止のための有効な対策を考えることをねらいとした。第4時では、喫煙と飲酒の健康影響や、社会的対策などの知識・理解を深める授業を実施した。第5時では、その復習をするとともに、ワークシート

I（資料2）を用いて、何が喫煙のきっかけになるのか推測をさせた。多くの生徒が、「喫煙しても何の解決にもならないことを分からせる」といった内容であったので、良い意見を記述できている数名に発表させることを通して、喫煙の開始には自己肯定感が関わっていることに着目させた。

グループ学習では、有効な喫煙防止や禁煙のための対策を考えさせた。グループ学習が一部の生徒のみの活動にならないよう、ワークシートⅡ（資料3）に個人で取り組ませ、自己の考えをまとめさせてから実施した。このワークシートⅡ及びグループ学習が評価の場面である。評価規準は思考・判断「喫煙について、自分や周囲の人の生活行動を振り返り、喫煙防止のための方策を分析、整理し説明している。」である。評価は観察と、ワークシートⅡの記述内容を基に行った。

授業の最後にはループリック（資料1）を使って、振り返りとして生徒に自己評価をさせた。この自己評価も評価の補助資料として活用した。グループ学習を取り入れた理由として前述したが、思考力・判断力を育成するためには、自己の中だけで考えるのではなく、仲間の意見を受け入れ、さらに対話の中で思考を深め判断できるようになることも重要と考えた。そこで、仲間との関わりという観点を取り入れて、ループリックは二つの観点に分けて作成した。「Ⅰ 喫煙に対する対策」は主にワークシートの記述内容や発言内容の評価に使用した。「Ⅱ 仲間との関わり」は主にグループ学習中の生徒同士のやり取りを観察で評価する際に使用した。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
展開	○ワークシートⅠ「喫煙の始まり」 ・高校生の事例から喫煙を始める要因を考える。 ・何名か発表する。 ○グループ学習 ワークシートⅡ「3つの場面での喫煙対策」 ・自分のことだけでなく、ワークシートⅠのAくんのことも考えて記入する。 ・まずは一人で記入する。 ・記入ができたなら5～6人のグループになって、有効な喫煙対策をまとめる。 ・人の意見に対して、必ず一回は質問をする。 ・最後に各班発表をする。 ○振り返り ・ループリックで本時を振り返り、次時への課題を明確にする。	・ループリックを配付し、最後に自己評価をすることを伝える。課題解決を目指す中で、できるようになってほしい内容であることも伝える。 ・ワークシートⅠで自己肯定感が喫煙防止のために重要な一つの要因であることに気付かせる。 評価規準【思考・判断】 喫煙について、自分や周囲の人の生活行動を振り返り、喫煙防止のための方策を分析、整理して説明している。（観察、ワークシート） 【支援】 ・机間指導を行い、記入が十分ではない生徒に助言する。 ・意見交換が活発でないグループに対して、生徒が相互に意見を出せるような助言を与える。 ・自己の発言や態度は、グループ活動にどのような影響を与えているかについても振り返らせる。

<資料1 ルーブリック>

	喫煙と健康 【思考・判断】のルーブリック 『3つの場面での喫煙対策』			
	4	3	2	1
I 喫煙に対する対策	学習した内容を基にし、自己肯定感に着目した喫煙の防止や禁煙対策について考えを述べている。 さらに、それらを筋道を立てて具体的に説明できる。	学習した内容を基にし、自己肯定感に着目した喫煙の防止や禁煙対策について考えを述べている。	喫煙の防止や禁煙対策について考えを述べている。	ほとんど意見を出さない。
II 仲間との関わり	質問等に対して返答ができ、相手の意見に対しては疑問点を見付けることができる。 さらに、他の意見を取り入れながら新しい対策を提案することができる。	相手に自分の意見を伝えることができる。 質問等に対して返答ができ、相手の意見に対しては疑問点を見付けることができる。	相手に自分の意見を伝えることができる。 質問等に対して返答ができる。	相手に自分の意見を伝えることができない。 相手の意見を聞き入れない。

<資料2 ワークシートI>

男子高校生のAは、苦しい受験勉強の甲斐もなく、大学入試に全て失敗してしまった。新年度になり、Aの友人たちは皆進学し、Aは自宅で浪人生活を始めた。半年が経ち高校時代の友人たちからは音信不通となり、交際していたガールフレンドからは「他に好きな人ができた」ということで別れを告げられた。受験勉強は苦しく、成績も伸び悩んでおり、Aは憂鬱晴らしのため、喫煙を始めてしまった。

Aが喫煙を始めた状況をよく考え、Aに喫煙をやめさせる方法を考えなさい。

喫煙をしたところで成績が伸びるわけでもないし
受験勉強が楽になるわけでもないといわらせる。



「授業の様子（グループ学習）」

<資料3 ワークシートII>

喫煙をしないために大切だと思うことを

予防（未然に防ぐ） ・ 治療（やめさせる） ・ アフターケア（やめた後のケア）

の3つの場面ごとに具体的に考えて、回答しなさい。

予防（未然に防ぐ）で大切なこと
喫煙の悪い影響を知るとか、タバコを吸いにくい状況をつくることなどが大切だと思う。
例えば、タバコ税を上げるとか、タバコを吸える場所を少なくすることは、とても効果があると思う。
でも、人の行動は心の状態によって左右されるので、みんな違って支え合って、心の健康を保つようにすることも大切だと思う。

治療（やめさせる）で大切なこと
吸い続けることで、将来どうなるか考えさせること
急に、無理にやめさせたりしないで、ストレスをできるだけためないようにすること
専門家の（病院とか）力をかりることも大切だと思う。

アフターケア（やめた後）で大切なこと
喫煙はもうしないという強い気持ちも大切だけど、家族が近くで支えることとか、
そんな家族を思う気持ちを持つことが大切だと思う。
喫煙以外のストレス発散方法を見つけることも大切だと思う。

(2) 評価の様子

ア ルーブリック「Ⅰ 喫煙に対する対策」の評価

ワークシートⅡを基にグループ学習を行い、喫煙防止のための有効な取組をグループでまとめたものを発表させた。始めにワークシートⅡに記入してからグループでの話し合いを行わせた。ワークシートの記述状況と評価は右の表のとおりである。

評価1に該当する、意見を書けない生徒はいなかった。

評価4に該当した生徒に特に特徴として見られたことは、ルーブリックを見ながら記述内容や発言内容を修正していた点である。理由や具体例を加えたり、相手に伝わりやすいよう順序立てて説明をし直したりする姿が見られた。

評価3に該当する生徒は、個人の努力の他に、他者のサポートが重要であると考えたり、自己肯定感に着目したり、学習した知識を基に喫煙対策について述べていたが、理由などはあまり記述できていなかった。

評価2であった生徒は、自己の主観的な意見しか述べられていなかった。そこで、グループ学習中に生徒の意見に対して質問するなどして、もっと幅広い視点があることに気付かせた。

	生徒の記述例 (ワークシートⅡ「予防で大切なこと」)
評価 4	・喫煙の悪影響を知ることや、たばこを買いにくい状況をつくる（例えばたばこ税をあげるなど）ことが大切だと思う。ただ、人の行動は心の状態によって左右されるので、みんなでいつも支え合って、心の健康を保つようにすることが大切だと思う。
評価 3	・周りの人の呼びかけ、そうさせない環境作り、自分の意思。
評価 2	・友人や先輩に誘われたりしても「絶対に自分はやらない」という強い意志を持つ。

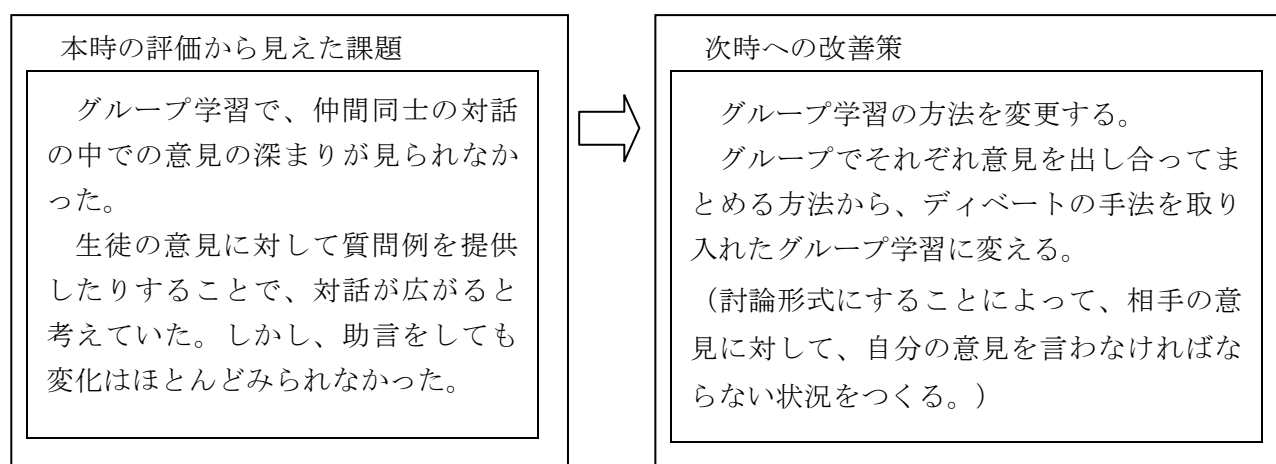
イ ルーブリック「Ⅱ 仲間との関わり」の評価

グループ学習中の生徒の様子からの評価は、一部の生徒が「3」で、ほとんどの生徒が「2」であった。人の意見について、さらに意見を深めていく様子はほとんどみられなかった。

あるグループを例に挙げる。ワークシートⅡに各自記入した内容を発表し、それに対して誰かが感想を伝える。全員が発表した後に良いものを選びグループのまとめとしていた。グループ学習の中で質問といえるものはほとんどなかった。「必ず質問をしてみよう」「本当にその対策は効果があるか考えてごらん」などと呼びかけても、自分や周囲の人の具体例で盛り上がり話が終わるという状況だった。教師が簡単な質問をした場合は、ほとんどの生徒が答えることができた。

なお、授業の最後にルーブリックを使って自己評価をさせたが、教師の評価と生徒の自己評価はほぼ一致した。何名かにルーブリックの感想を聞いた。「自分の課題が分かった」「授業の始めにルーブリックの説明を聞いたので、何をすればいいのか分かった状態で授業を受けることができた。最初にルーブリックを見ていなかったら、自己評価した時、もっとできていなかったと思う。」といった返答が多かった。

(3) 評価から見た授業の改善点



(4) 授業の展開②

第6時は、グループで喫煙や飲酒に対する対策についてその有効性について話し合い、意見をまとめる予定だった。しかし、前時の反省から、ディベートの手法を取り入れたグループ学習を実施することにした。

ディベートは、一つの論題に対し、2チームの話し手が肯定する立場と否定する立場とに分かれ、自分たちの議論の優位性を聞き手に理解してもらう事を意図したうえで、客観的な証拠資料に基づいて議論をするコミュニケーション形態である。対立する主張を導入することで、その論題について多面的な検討が可能となり、適切な意志決定が可能となる。ディベートを行うためには、理解力、分析力、構成力、伝達力といった能力が必要である。裏を返せばこれらの能力を身に付けるのに有効だといえる。本来、有効なディベートを実施するためには、様々なルールが設けられるが、今回はその手法を一部のみ取り入れた。肯定と否定の違う観点から社会的対策を比較、分析、評価することで、メリット、デメリット、あるいはその価値などに気付き、社会的対策をより効果的にするための方策を検討しやすくなると考えた。あるグループの討論の内容を資料5に示した。

使用したルーブリックは資料4のとおりである。展開①のルーブリックと同様に、二つに分けて作成した。「Ⅰ 社会的対策の効果の是非」は主にワークシートの記述内容や発言内容の評価に使用した。「Ⅱ 仲間との関わり」は主にグループ学習中の生徒同士のやり取りを観察で評価する際に使用した。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
展開	○グループ学習（ディベートの手法） 『喫煙や飲酒を防止するための社会的な対策の効果はあるか！？』 ・ 1 グループ 4～5 人。 ・ 各グループ一つ社会的対策を決める。 「効果がある」「効果がない」に分かれて討論する。	・ ルーブリックを配布し、最後に自己評価をすることを伝える。課題解決を目指す中で、できるようになってほしい内容であることも伝える。 ・ 前時の課題を思い出させる。

・ 討論した内容から、それぞれの立場のメリット、デメリットを整理し、社会的対策をより効果的にするにはどうすればよいか、グループの意見をまとめ発表する。 ○振り返り ・ ルーブリックで本時を振り返り、次時への課題を明確にする。	【評価規準 思考・判断】 喫煙や飲酒を防止するための対策について、社会生活や事例と比較したり、分析したり、評価したりするなどしている。また、筋道を立ててそれらを説明している。（観察、発表） 【支援】 意見交換が活発でないグループに対して、生徒が相互に意見を出せるような助言を与える。 相手の意見を否定せず、自分の意見をどうしたら受け入れてもらえるか考えさせる。
--	---

<資料4 ルーブリック>

	喫煙と健康【思考・判断】のルーブリック 『喫煙や飲酒を防止するための社会的対策の効果はあるか！？』			
	4	3	2	1
I 社会的対策の 効果の是非	日常生活を振り返り、分析したことだけでなく、学習した内容などの資料を基に、比較したり評価したりして根拠を明確にして社会的対策について考えを述べている。 さらに、それらを筋道を立てて分かりやすく説明できる。	日常生活を振り返り、分析したことだけでなく、学習した内容などの資料を基に、比較したり評価したりして根拠を明確にして社会的対策について考えを述べている。	日常生活を振り返り、分析したことを基に社会的対策について考えを述べている。	ほとんど意見を出さない。
II 仲間との 関わり	質問等に対して返答ができ、相手の意見に対しては理由を明確にして同意や反対ができる。さらに、他の意見を取り入れながら新しい対策を提案することができる。	質問等に対して返答ができ、相手の意見に対しては理由を明確にして同意や反対ができる。	質問等に対して返答ができる。	相手の意見を聞きいれない。

<資料5 グループ学習（ディベートの手法）の様子>

題材「未成年者喫煙禁止法は、未成年の喫煙防止に効果があるか」

A：効果はない。未成年でも吸っている人はたくさんいる。

B：私は効果があると思う。吸っていない人の方が多いと思うから。

A：でも、それは法律で定められているから吸ってないと言い切れない。

高校生の喫煙経験率は下がってきているけど、法律はもっと前からあった。

だから、法律で禁止していること以外の取組が効果があったんだと思う。

B：コンビニとか自販機でタバコを購入できないやつ？

A：うーん。そうかな。でも、タスポを貸してくれる大人もいるし、コンビニでもうまくごまかせば買える。

B：確かに、タバコをみんなが吸わないというところまではいってないけど、減っているってことは、効果があるってことだよ。

A：そうだね。でも法律が効果があるんじゃないなくて、タスポとかの取組が効果があったってことだよ。

B：タスポとかの取組が実現しているのは、法律があったからじゃない？

A：・・・。タスポの制度は、タバコ業界が自主的に取り組んでいる制度だから、法律は関係ない！

B：じゃあ、なんでタバコ業界が自主的にそんなことしようと思ったんだろう。勝手にそんな制度を作ってもみんなが守ろうって思えたのはなんでだろう。法律があったからだよ。

A：・・・でも、法律で決まっていなくても守らない人は、きっとずっと守らない。

B：うん。全員に対して効果があるっていうのはすごく難しいと思うけど、一定の効果があるってことは言えると思う。

A：・・・。

B：法律があるだけでは、喫煙防止には不十分かもしれないけど、法律があるから色々な取組ができることを考えたら法律は喫煙防止に効果があるっていうことだよ。

A：本当に法律のおかげで効果が上がっているの？

B：例えば、タスポはできたころは大人が貸したり、自販機にぶら下げてたりしていて問題がたくさんあったけど、法律があったから、罰せられて悪いことする人も減ったんだよね。

A：罰がないとだめってことか？

・・・続く・・・

(5) 前時から改善した点について

改善した点

グループ学習の中で、仲間同士の対話を通しての意見の深まりが見られなかったため、ディベートの手法を取り入れたグループ学習に変更した。



改善後の授業の様子

資料5のように、社会的対策について、その考えに至る理由なども伝えることができた。

さらに、ただ自分の意見を述べる場ではなく、意見を受け入れながら考え、判断し、また考えるといった思考が深まる場にすることができた。

5 成果と課題

(1) 成果

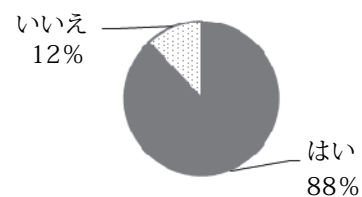
本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 評価を基に授業内容の改善を図ることで、グループ学習をより効果的なものにできたこと

思考力・判断力といえば話し合い活動をすれば身に付くと思いがちであった。しかし今回、ルーブリックで明確な評価基準をもって評価したことで、それでは思考力・判断力を身に付けさせるためには十分ではないことに気付くことができた。

ディベートの手法を取り入れたことで、生徒は自分で考え、判断し、また考えるといったグループ学習をすることができた。生徒の事後アンケートでも、「授業を通して、喫煙や飲酒を防止するための思考力・判断力が高まったと思いますか」という問いに対して、88%が「はい」と答えている。

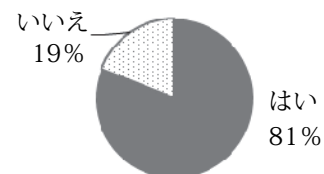
喫煙や飲酒を防止するための思考力・判断力が高まりましたか



イ ルーブリックを生徒にも示すことで、自己の学習状況を確認し、その後の授業への取り組み方を修正できたこと

生徒は、ルーブリックを見ることで、授業の中で自己の学習状況と評価基準を照らし合わせ、自ら取り組み方を修正するなどの、意欲の向上が見られた。事後アンケート結果でも、「ルーブリックから、さらにどんなことを考えれば良いかヒントを得られましたか」の問いに対して、81%が「はい」と答えている。

ルーブリックから、さらにどんなことを考えれば良いかヒントを得られましたか



(2) 課題

本事例の課題として、次のようなことが挙げられる。

今回の授業で使用したルーブリックは、担当教師が生徒の理想的な様子等をイメージして作成した。今後、実際の生徒の様子と照らし合わせ、改善していく必要がある。また、他の教師の意見を取り入れることも重要であろう。その際には、他の教師と話し合う中で、評価に対する意識の統一が図れるということも期待できる。

使用教科書等

- ・『現代高等保健体育』大修館書店
- ・『図説現代高等保健』大修館書店

Ⅳ おわりに

本研究では、ソフトボール、バスケットボール、保健の授業において思考力・判断力を育む学習の場を設定し、評価を指導に生かすことで授業の改善を図った。

3事例ともにルーブリックを作成・使用して評価を行った。ルーブリックがあることで評価基準が明確になり評価が容易になっただけでなく、作成する過程で、ねらいが達成された生徒の状態を具体的に想定でき、授業の指導法を考える際にも役立った。さらに、より詳細な評価基準をもつことで、改善すべき点も見付けやすくなった。評価しやすくするためにルーブリックを取り入れたが、指導と評価の一体化を図りやすくするツールとしての役割も果たすことができると、事例を通して感じる事ができた。大切なことは、ルーブリックを作成することではなく、明確なねらいと生徒の状態を具体的に想定できる評価基準を持つことである。

また、ルーブリックを生徒と共有し自己評価にも使用したことで、評価の補助資料として活用できただけでなく、生徒が自らの学習状況を把握し、自己がより良い段階に到達するために何をすればよいのかを意識させる事ができた。学習指導要領の「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」に「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の重視」とある。教員が指導と評価の一体化を図ることが重要であるのと同じように、生徒が学習と評価の一体化を図ることもまた重要なことである。今後は、教員だけでルーブリックを作成・改善するのではなく、生徒とともに作成することも「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動」に役立つと考える。

しかし、生徒とルーブリックを共有して授業を行った場合のデメリットも考えなければならない。生徒が「ルーブリックに書いてあることをただすればいい」と考えた場合は、ルーブリックに書いてあることを実践したようにみせる、表面的な活動になるおそれもある。生徒に思考力・判断力が身に付いているのではなく、見本となる行動をただ表面的に真似しているだけでは意味がないのである。ルーブリックを生徒に示すことが効果がある場合とない場合の見極めや、ルーブリックの効果的な示し方を検討していく必要がある。

思考力・判断力については、どう育てたらよいのか具体的なイメージをまだあまりもてていないのではないかとはじめに述べた。しかし、体育を例にあげると、自己や仲間の課題を設定して練習方法を工夫したり、状況を把握し、作戦や戦術を立てたりすることなどは、スポーツをするにあたって非常に重要であることは、全ての保健体育科教員が当然と思っていることである。さらに、思考力・判断力と意識せずに生徒に伝えたり、学習の場面を設定したりしている教員も多くいるはずである。本調査研究においても、新たなことに取り組んだのではなく、今まで授業で実践してきた内容を、思考力・判断力を育成することを明確なねらいとして取り上げて授業を再構築しただけである。

事例1では、生徒自身の動きと、見本となる動きを視覚的に比較することによって、自分の動きに興味をもち、生徒自ら課題に気付く、その解決方法を見付けることができた。視覚情報を提供することは、これまでも技能の向上のために取り入れたことがあった。最終的には技能の向上に繋げることが重要であるが、その過程に着目し、生徒の興味を引く教材を提供することで、生徒同士で考え合い、課題を解決していく場とすることができた。

事例2では、生徒に作戦や戦術を考えさせる場を設定した。これまでも、ゲームを実施する際に作戦を生徒に考えさせることはあった。しかし、ゲームの場面でいきなり作戦を考えさせても、種目の経験者が意見を述べるくらいで、全員が作戦や戦術を考える場にすることは難しかった。本事例では経験者以外の生徒が作戦や戦術を考えられるように、課題を絞って提供している。さらに、その課題の解決に必要な技能や知識を高めてから課題を考える時間になるように、単元を計画している。この単元を通した思考力・判断力の育成に向けた指導計画があったことで、生徒の多くが作戦や戦術を考

えながら授業に取り組むことができた。

事例3では、保健において話し合い活動を取り入れた。話し合い活動自体はよく取り入れる手法である。しかし、ただ話し合うだけでは、生徒が自分の考えを広げたり深めたりする場としては不十分である。本事例では、自分一人で考えることから始まり、グループでの話し合い、他のグループの発表を聞くこと、さらにディベートの手法を取り入れた対立する主張を導入した。それによって、話し合い活動を、生徒が多面的意見にふれ、共感したり疑問をもったりする場にすることができた。

思考力・判断力という敷居が高く感じるが、今回の事例で取り組んだように、今まで実施してきた授業内容を少し工夫するだけで十分な場合もあるだろう。その際に、指導と評価の一体化を図っていけば、より効果的に生徒の資質や能力を育むことが期待できる。

参考として、「言語の役割を踏まえ言語活動を分類したもの」と「思考力・判断力・表現力を育むための学習活動」を以下に掲載する。

分類…言語の役割を踏まえ言語活動を分類したもの
(1) 知的活動（論理や思考）に関すること
ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること
(i) 事実を正確に理解すること
(ii) 他者に的確に分かりやすく伝えること
イ 事実等を解釈し説明するとともに、自分の考えをもつこと、さらに互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること
(i) 事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること
(ii) 考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること
(2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること
ア 互いの存在について理解を深め、尊重すること
イ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝え合ったりすること
活動…思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動
① 体験から感じ取ったことを表現する
② 事実を正確に理解し伝達する
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
④ 情報を分析・評価し、論述する
⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

引用 文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集

～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【高等学校版】』平成24年6月

◇平成25年度高等学校における教科指導の充実 研究協力委員・研究委員（保健体育科）

研究協力委員

栃木県立宇都宮北高等学校	教 諭	海老名 貴 之
栃木県立高根沢高等学校	教 諭	森 本 明 子

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	板 橋 美 季
----------------	------	---------

◇参考文献

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総則編』平成21年3月
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』平成21年12月
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 保健体育）』平成24年7月
- ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【高等学校版】』平成24年6月
- ・文部科学省『学習指導と学習評価に対する意識調査報告書』平成22年1月
- ・今関豊一『体育科・保健体育科の指導と評価～学年別でみる授業づくりの工夫』ぎょうせい
- ・西岡加名恵・田中耕治『活用する力を育てる授業と評価～パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版
- ・高浦勝義・松尾知・山森光陽編著『ルーブリックを活用した授業づくりと評価②中学校編』教育開発研究所
- ・宇津木妙子・三科真澄監修『考える力を身につけるソフトボール練習メニュー200』池田書店
- ・日本ディベート協会ホームページ <http://japan-debate-association.org/>

高等学校における教科指導の充実
保健体育科
保健体育における指導と評価の一体化
～思考力・判断力の育成を目指して～

発 行 平成26年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>